

令和元（2019）年度キチジ太平洋北部の資源評価

担当水研：東北区水産研究所

参画機関：青森県産業技術センター水産総合研究所、岩手県水産技術センター、
宮城県水産技術総合センター、福島県水産資源研究所、
福島県水産海洋研究センター、茨城県水産試験場

要 約

キチジ太平洋北部の資源量を着底トロール調査により推定した。資源量は豊度の高い年級群の成長により長期的に増加傾向を示しており、2019年の資源量（9,601トン）から資源水準は高位、直近5年間（2015～2019年）の資源量の推移から動向は減少と判断した。再生産成功率（RPS）は2004年級群以降低く、親魚量が増加しているにもかかわらず加入量の少ない年が続いている。このため、適切な漁獲で親魚量を確保しつつ今後の加入を促すことを管理目標とした。ABC算定のための基本規則1-3)-(2)に基づき、 $F_{limit} = 1.0F_{40\%SPR}$ として2020年ABCを算定した。

管理基準	Target/ Limit	2020年ABC (トン)	漁獲割合(%)	F値(現状のF値か らの増減%)
1.0F40%SPR	Target	360	4.3	0.047 (-4%)
	Limit	450	5.3	0.058 (+20%)

Limitは管理基準のもとで許容される最大レベルの漁獲量、Targetは資源変動の可能性やデータ誤差に起因する評価の不確実性を考慮し、管理基準の下で安定的な資源の維持が期待される漁獲量である。本系群のABC算定には、規則1-3)-(2)を用いた。 $F_{limit} = \beta_1 \times F_{40\%SPR}$ 、 $F_{target} = \alpha \times F_{limit}$ とし、 β_1 には1.0、係数 α には標準値0.8を用いた。F値は2歳魚以上の全年齢群で同値と仮定し、漁獲割合から計算した。現状のF値($F_{current}$)は2016～2018年のF値の平均(=0.048)、漁獲割合は2020年の漁獲量/資源量である。なおABCは10トン未満を四捨五入した値である。

年	資源量(トン)	親魚量(トン)	漁獲量(トン)	F値	漁獲割合(%)
2015	10,383	4,783	475	0.050	4.6
2016	12,021	5,581	484	0.044	4.0
2017	11,246	4,998	460	0.044	4.1
2018	10,732	5,059	559	0.057	5.2
2019	9,601	4,463	427	0.048	4.4
2020	8,486	—	—	—	—

年は暦年、資源量は漁獲対象資源量、2018年の漁獲量は暫定値である。

2019年、2020年の値は、2019年のF値を $F_{current}$ と仮定した場合の将来予測に基づく値

とした。

水準：高位 動向：減少

本件資源評価に使用したデータセットは以下のとおり

データセット	基礎情報、関係調査等
漁獲量	沖合底びき網漁業漁獲成績報告書（水産庁、沖底） 青森～茨城（5）県の農林統計（農林水産省、1975～2005年の沖底以外） 主要港水揚げ量（青森～茨城（5）県、2006～2018年の沖底以外）
努力量（網数）、CPUE	沖合底びき網漁業漁獲成績報告書（水産庁、沖底）
漁獲物の体長組成	生物情報収集調査（水研、青森～宮城（3）県）
資源量、年齢別資源尾数、資源の体長組成、再生産成功率	底魚類資源量調査（10～11月、水研） 着底トロール（トロール網の採集効率に Logistic 式を仮定）
自然死亡係数（M）	年あたり $M=2.5/\text{寿命}$ （田中 1960） $=2.5/20=0.125$ を仮定

1. まえがき

キチジは、東北地方や北海道ではメヌケ類とともに「赤もの」と称され、魚価が高く、重要な漁獲対象資源の1つである。しかし、長期的な漁獲量や単位努力量あたりの漁獲量（CPUE）の動向から、1990年代には資源は低位水準にあると考えられた。こうした背景から、太平洋北部（沖合底びき網漁業の太平洋北区に相当し、北海道太平洋側を含まない東北地方太平洋岸沖の海域を指す）のキチジは、水産庁により平成13（2001）年度から実施された「資源回復計画」に基づき、平成15（2003）年以降、保護区の設定による資源回復が図られてきた。資源回復計画は平成23（2011）年度で終了したが、資源回復計画で実施されていた措置は平成24（2012）年度以降も「資源管理指針・計画」に基づき、継続して実施されている。

2. 生態

(1) 分布・回遊

キチジは、駿河湾以北の本州および北海道・千島列島の太平洋岸沖、オホーツク海、ベーリング海に広く分布する。我が国周辺では、銚子以北の太平洋岸沖とオホーツク海で漁獲されるが、東北地方では常磐海区以北での漁獲が多い。

太平洋北部では、キチジは水深350～1,300 m付近の深海域に生息しており（図1）、水深500～800 mで分布密度が最も高く、海底谷等の地形が複雑な場所に多い（北川ほか1985）。太平洋北部では回遊に関する研究は行われていないが、オホーツク海の北見大和堆で放流した個体の一部が太平洋側で再捕されたことが報告されている（木下ほか1999）。

また、北海道を含む太平洋岸沖の個体間において、遺伝的隔離は観察されていない (Sakaguchi et al. 2014)。

(2) 年齢・成長

大型魚 (体長 25 cm 以上) では耳石縁辺部が透明化し、輪紋をうまく判別できないため、成長は十分に解明されていない。体長 20 cm 程度までは雌雄間で成長にほとんど差がないことが報告されている (服部 1998)。また、資源が増加した近年には、小型魚の成長が以前に比べて悪くなったことが報告されている (濱津・服部 2003、Hattori et al. 2007)。

2011 年の標本から得られた成長式と体長-体重の関係式を下記に示す (図 2)。

$$SL = 320 \left(1 - e^{-0.0438(t+3.433)} \right), BW = 1.867 \times 10^{-5} \times SL^{3.068}$$

SL は標準体長 (mm)、BW は体重 (g)、年齢 (t) の起算日は 4 月 1 日である。

キチジの成長は個体差が大きい、平均的には 1 歳で体長 5.6 cm、2 歳で 6.8 cm、3 歳で 7.9 cm、4 歳で 8.9 cm、5 歳で 9.9 cm、6 歳で 10.8 cm と非常に遅い。体長 20 cm に達するには 10 年以上を要し、最大で体長 30 cm 程度となる。なお、寿命については、飼育下で全長 20 cm 程度の個体が 9 年後に全長 27~28 cm となったことから (國廣 1995)、20 歳程度には達するものと考えられる。

(3) 成熟・産卵

キチジの成熟体長は、過去の報告では海域によって異なるとされていたが (三河・伊藤 1981)、組織学的観察により再検討した結果、近年の成熟体長には海域間による差は認められなかった。50%成熟体長は、雌は 15 cm (図 3、服部ほか 2006)、雄は 9 cm (濱津・服部 2004) であることが報告されている。2011 年の年齢-体長関係に基づき年齢別成熟割合を調べると、雌は 10 歳で 11%、11 歳で 35%、12 歳で 69%、16 歳以上で 100% が成熟、雄は 4 歳で 0%、5 歳以上で 100% が成熟していた。ただし、キチジでは年級群による成長差が大きいため、年齢別成熟割合に年変化があると推測される。

産卵期は 1~4 月で、平均卵径 1 mm 強の楕円形の卵を 1 万~15 万粒産出する (三河・伊藤 1981)。また、1 産卵期に 2 回の産卵を行うとの報告がある (Koya et al. 1995、國廣 1996、濱津・服部 2004)。4 月に太平洋北部全域で行われた調査では成魚の集群が認められず、産卵場は青森県~茨城県沖の太平洋岸沖全域に及んでいる可能性が高い (濱津・服部 2002)。卵は浮遊性でゼラチン質のひも状卵囊に包まれた状態で産み出され (深滝 1963、Koya and Matsubara 1995)、稚魚ネット等により表層で採集される。天然の仔稚魚の生態については不明であるが、仔稚魚は中層に生息すると考えられる (服部 1998)。

(4) 被捕食関係

キチジは主にエビ類、オキアミ類、クモヒトデ類、端脚類、多毛類および魚類を摂餌する (三河 1952、東北水研八戸支所 1956、後藤 2004)。特定の索餌期はなく、周年索餌する。被食については、体長 10 cm 以下のキチジが体長 30 cm 以上のマダラに捕食されてい

た例がある(橋本 1974)。また、アブラガレイによる被食も報告されているが(三河 1955)、現在の太平洋北部ではアブラガレイの漁獲量は少なく、資源量も少なくなっていると推測されるため、キチジ資源への捕食圧は小さいと考えられる。

3. 漁業の状況

(1) 漁業の概要

太平洋北部のキチジは主に沖合底びき網漁業(以下「沖底」という)、小型底びき網漁業(以下「小底」という)、底はえ縄、底刺網により漁獲されるが、沖底以外の漁獲量は少なく、2018年には沖底による漁獲が全体の9割以上を占めていた。当海域の沖底は海区により漁法が異なり、尻屋崎海区ではかけまわし、岩手海区では2そうびき(一部かけまわし)、金華山海区以南ではトロールによる操業が行われている(小海区の区分は図4参照)が、いずれの海区においてもキチジは重要な漁獲対象となっている。なお、沖底では様々な魚種が漁獲対象となるため、各魚種の資源状態により漁獲の主対象が変化する。1990年代以降、沖底船は9~12月にスルメイカを狙って操業することが多くなっており、スルメイカより深場に生息するキチジに対する漁獲圧は低下していると推測される。

(2) 漁獲量の推移

キチジの全漁業種別を合わせた漁獲量は1975年以降減少し、1997年には過去最低の258トンとなった(図5、表1)。その後、若干増加して2006~2010年には600トン前後で推移したが、2011年の東日本大震災(以下「震災」という)の影響により再び減少した。2015年以降はやや増加しており、2018年は559トン(暫定値)であった。

漁業種別別の漁獲量をみると、沖底の漁獲量は1970年代には2,000トン前後であったが、その後減少傾向が続き、1997年には229トンと過去最低となった(図5、表1)。2003~2010年には緩やかに増加傾向となり、500トン前後で推移していた。2011年には震災の影響により390トン、2014年には319トンまで減少したものの、その後は増加傾向を示し、2018年には537トン(暫定値)となった。小底の漁獲量は1970年代には1,000トン前後であったが、その後沖底と同様に減少傾向となり、2015年には1トンとなるなど非常に低い値で推移している。

沖底の小海区別漁獲量をみると、1998年以降、金華山海区および常磐海区での漁獲量は増加傾向であったが、常磐海区では2011年の震災以降、操業自粛のために漁獲量が激減した(表2)。また、金華山海区では2012年に漁獲量が一時的に増加したが、これは加工場の減少やマダラの水揚げ制限等により、鮮魚として出荷するキチジを狙う操業が増加したためであった。2014~2016年には岩手海区の漁獲量が増加し、2018年も高い水準を維持した。

(3) 漁獲努力量

近年の有漁網数(漁船毎のキチジが漁獲された日の網数の合計)は、長期的にはすべての漁法で低い水準にある(図6、表3)。尻屋崎~岩手海区のかけまわしでは、1972~1987年にかけて、増減を繰り返しながらも9,470(1984年)~22,069網(1980年)で推移していたが、その後は低い状態が続いており、2018年は3,707網(暫定値)であった。岩手海

区の2そうびきでは、1993年(5,444網)をピークに緩やかに減少し、2010年以降は346(2013年)~820網(2010年)で推移しており、2018年は478網(暫定値)であった。金華山海区以南のトロールでは、漁獲努力量は大きく増減を繰り返している。1988~1996年までは減少傾向にあったが、1997年以降増加に転じ、2004年には14,952網となった。しかし、2005年以降再び減少傾向を示し、2011年には震災の影響で3,536網と大幅に減少した。その後は低い水準で推移しており、2018年は2,236網(暫定値)であった。震災以降、特に常磐海区の漁獲努力量は低い値となっており、その原因として福島県船が操業自粛していることや宮城県船が金華山海区主体で操業していることがあげられる。

4. 資源の状態

(1) 資源評価の方法

資源の状態は、毎年秋季に調査船若鷹丸(水産機構所属、692トン)を用いた着底トロール網による底魚類資源量調査(水深150~900m、2018年は計107地点;以下、「着底トロール調査」という)の結果に基づき評価した(補足資料1)。調査海域は青森県~茨城県沖であり、本系群の分布範囲をほぼ網羅している(補足資料3)。調査の詳細については、服部ほか(2006)および時岡ほか(2019)に述べられている。調査で得られたデータから、面積-密度法により年齢別資源尾数および資源量を求めた(補足資料2~4)。なお、資源評価に用いた年齢別資源尾数および資源量は、Logistic式による採集効率を仮定して計算した(図7、補足資料2、補足資料4の補足表4-4、補足表4-5、補足表4-6、補足表4-7、平成21年度の報告を参照)。

(2) 資源量指標値の推移

キチジは主に沖底により漁獲され、そのCPUE(漁獲量/有漁網数)はキチジの資源動向を長期的に判断できる指標であった。CPUEの推移をみると、いずれの小海区・漁法においても1990年代まで減少傾向にあったが、その後は増加に転じた(図8、表4)。漁業種類別にみると、岩手海区の2そうびきおよび金華山海区以南のトロールにおいて2011年以降のCPUEの増加が顕著であった(図8)。また、異なる3つの漁法のCPUEを統合して太平洋北部全体の指標値を得るため、各年について重み付けCPUE(漁法ごとのCPUEを漁法ごとのCPUEの平均値で除し、各々の漁獲量を乗じたものを合計し、さらにその年の合計漁獲量で除したものを求めたところ、同様に2011年以降に急増していた(図8、補足資料5)。しかし、キチジのような寿命が長く成長の遅い資源では、こうした急激な資源の増加は考えにくく、また2011年以降は震災の影響により福島県沖の操業が制限されるなど、操業実態が変化しているものと考えられる。したがって本報告では、2011~2012年にかけてのCPUEの急増およびその後の推移は、キチジの資源動向を正しく示していない可能性があるとして資源の水準・動向の判断には使用していない。

(3) 漁獲物の体長組成

2018年の漁獲物の体長組成をみると、体長7cm程度(2~3歳魚)から漁獲対象となっていた(図9)。岩手県以北、宮城県以南ともに体長15cm以上の個体が漁獲の主体となっていたが、体長25cm以上の個体はほとんど漁獲されていなかった。

(4) 資源量と漁獲割合の推移

着底トロールの面積-密度法および Logistic 式による採集効率から推定した資源量は、豊度が高かった 1999～2002 年級群の成長により（補足資料 3 の補足図 3-2）、2000 年以降増加したと考えられる（図 10）。資源量は 2016 年に 1996 年以降で最高となる 12,021 トンまで増加し、2019 年はやや減少して 9,601 トンとなったものの、高い水準を維持した（補足資料 4 の補足表 4-8）。資源尾数の推移をみると、2005 年の 131,833 千尾をピークに、以後減少傾向が認められる（図 11、補足資料 4 の補足表 4-7）。特に 2～4 歳の若齢魚の資源尾数が急速に減少しており、2005 年は 113,419 千尾であったが、2012 年には 3,565 千尾と 1996 年以降最も少ない値となった。2015～2017 年においては資源全体で増加傾向を示したが、2017 年の 106,208 千尾を境に再び減少に転じ、2019 年は 71,771 千尾（うち 2～4 歳魚は 4,321 千尾）となった。なお、F 値および漁獲割合は 2017 年まで減少傾向を示しており、2018 年はやや増加して 0.057 および 5.2 % となったものの、依然低い値で推移している（図 12、補足資料 4 の補足表 4-9）。

(5) 再生産関係

再生産成功率（2 歳魚尾数/雌親魚量：RPS）は 1999～2002 年級群で高く、これらの年級群の生残が良かったと考えられる（図 13）。このことから、2000 年代の資源量の増加は主に 1999～2002 年級群の高い加入とその後の良好な生残によるものと考えられた。この 1999～2002 年にはアリューシャン低気圧の北偏に伴う移行域のクロロフィルフロント（表面クロロフィル a 濃度が 0.2 μL の海域）の北偏が起こり（Bograd et al. 2004）、またこの期間にはアカイカの CPUE が低かったことが報告されている（Ichii et al. 2006）。これらのことから、原因は明らかでないものの、海洋の環境条件がキチジの加入量に影響した可能性も考えられる。キチジ類は孵化後 1 年以上にわたり海底から離れた遊泳生活を送ることが明らかとなっており（Moser 1974）、生活史初期、特に卵～遊泳期における生息環境の変化が生残に大きく影響している可能性がある。

2004 年級群以降の RPS は低い状態が続いており（図 13）、親魚量が増加しているにもかかわらず、加入量の少ない年が続いている（図 14、補足資料 4 の補足表 4-8）。RPS の値は 2012～2014 年級で若干の増加が認められたが、2016 年級は 0.2 尾/kg と 1996 年級以降最低となった。2013～2017 年の着底トロール調査では、体長 10 cm 以下の小型個体の出現が推測されたが、2018 年には分布の山が不明瞭となっている（補足資料 3 の補足図 3-2）。

(6) Blimit の設定

明瞭な再生産関係が認められないことから（図 15）、Blimit は設定していない。

(7) 資源の水準・動向

秋季の着底トロール調査から面積-密度法により資源量を推定し、資源状態を判断した。資源水準の区分は 1996～2019 年の資源量の最小値（1,611 トン、1996 年）と最大値（12,021 トン、2016 年）の間を 3 等分し、低中位の境界を 5,081 トン、中高位の境界を 8,551 トンとした（図 10）。2019 年の資源量が 9,601 トンであることから、資源水準は高位、動向は資源量の過去 5 年間（2015～2019 年）の推移から減少と判断した。

(8) 今後の加入量の見積もり

明瞭な再生産関係が認められないため、加入量を見積もっての将来予測は行っていない。

(9) 生物学的管理基準値（漁獲係数）と現状の漁獲圧の関係

YPR および SPR の式を用い、YPR および%SPR を求めた（図 16）。キチジでは、資源の増加に伴い成長が悪くなっているため（Hattori et al. 2007）、成長に関するパラメータを 2011 年時点の成長式および体長-体重関係式から求め、漁獲開始年齢を 3 歳、加入年齢を 1 歳 6 ヶ月（1.5 歳）、成熟年齢を 12 歳、寿命を 20 歳とした。

本報告では、 $F_{current}$ を 2016~2018 年の平均の F とした。図 16 から判断すると、 $F_{current}$ ($=0.048$) は、 F_{max} ($=0.144$)、 $F_{0.1}$ ($=0.088$) および $F_{40\%SPR}$ ($=0.058$) のいずれの値より低い値であった。

5. 2020 年 ABC の算定

(1) 資源評価のまとめ

キチジ太平洋北部の資源量は 2000 年以降増加傾向にある。これは高い再生産成功率により 1999~2002 年級群の加入量が増加し、この豊度の高い年級群が成長して資源量が増加したためと考えられる。2019 年の資源量は 9,601 トンと高い水準を維持した（図 10）。2004 年級群以降の再生産成功率は低い状態が続いており、今後の動向を注視する必要がある。

(2) ABC の算定

2020 年 1 月時点の資源量は、以下の方法で推定した。 F_{2019} は、 $F_{current}$ 、すなわち 2016~2018 年の F 値の平均 ($F_{ave\ 3-yr}$) と仮定した。ここで M を 0.125 とすると、2019 年の年間生残率は 0.841 となる。この値を 2019 年 1 月時点の年齢別資源尾数（補足資料 4 の補足表 4-7）に乘じ、2020 年 1 月時点の 3 歳魚以上の資源尾数を求めた。

年齢別資源尾数の推移から 1 歳魚が翌年の 2 歳魚になる際の比率を求めると、2015 年以降の直近 3 年間の比率は 0.692~5.363、平均値は 2.437 であった（補足資料 4 の補足図 4-1、補足表 4-1）。このことは、1 歳魚の採集効率が 2 歳魚以上よりかなり低いことを示している。この比率には年代間で一定の傾向が認められないことから、2020 年 1 月の 2 歳魚資源尾数は、採集効率を 1 と仮定した場合の 2019 年 1 月の 1 歳魚資源尾数に直近 3 年間の比率の平均値 ($=2.437$) を乘じ、Logistic 式から求めた 2018 年の 2 歳魚の採集効率（補足資料 4 の補足表 4-4）を除いて求めた。なお、2019 年 1 月の 1 歳魚資源尾数は 2018 年秋季の 1 歳魚資源尾数から 2 ヶ月分の漁獲および自然死亡分を引いた値である。

また、冬期の成長は悪いと考えられることから（服部 1998）、年齢別の平均体重は 10~11 月時点のものを翌年のものとみなせると仮定し、2020 年 1 月の平均体重は 2018 年秋季と同様と仮定した。以上の方法により資源量を推定した結果、2020 年 1 月の資源量は 8,486 トン、資源尾数は 62,445 千尾となり、ともに 2019 年より減少すると予測された（2019 年の資源量は 9,601 トン、資源尾数は 71,771 千尾）。

2000 年以降、資源量は増加傾向にある一方で、2004 年級群以降の RPS は低い状態が続いている。このため、適切な漁獲で親魚量を確保しつつ今後の加入を促すことを管理目標とした。2020 年の ABC は、ABC 算定のための基本規則 1-3)-(2)に基づき $F_{limit} = \beta_1 \times$ 基準

値、 $F_{target}=F_{limit} \times \alpha$ として算定した。本資源は成長が遅く、成熟年齢が高齢であることから基準値を $F_{40\%SPR}$ とし、 β_1 は資源水準が高位であることから 1.0 とした。また、不確実性を考慮した安全率 α を 0.8 とした。その結果、2020 年の資源量に対して計算される ABC_{limit} は 451 トン、 ABC_{target} は 363 トンとなった。

管理基準	Target/ Limit	2020 年 ABC (トン)	漁獲割合 (%)	F 値 (現状の F 値 からの増減%)
1.0 $F_{40\%SPR}$	Target	360	4.3	0.047 (-4%)
	Limit	450	5.3	0.058 (+20%)

Limit は管理基準の下で許容される最大レベルの漁獲量であり、Target は資源変動の可能性やデータ誤差に起因する評価の不確実性を考慮し、管理基準の下でより安定的な資源の維持が期待される漁獲量である。本系群の ABC 算定には、規則 1-3)-(2)を用いた。 $F_{limit}=\beta_1 \times F_{40\%SPR}$ 、 $F_{target}=\alpha \times F_{limit}$ とし、 β_1 には 1.0、係数 α には標準値 0.8 を用いた。F 値は 2 歳魚以上の全年齢群で同値と仮定し、漁獲割合から計算した。現状の F 値 ($F_{current}$) は 2016~2018 年の F 値の平均 (=0.048) であり、漁獲割合は 2020 年の漁獲量/資源量である。ABC は 10 トン未満を四捨五入した値である。

(3) ABC の評価

将来の加入予測の不確実性が大きいこと、年齢別資源尾数の推定に問題点が残ることから、異なる F に対応した資源量および漁獲量の予測は行っていない。

(4) ABC の再評価

昨年度評価以降追加されたデータセット	修正・更新された数値
2017 年沖底漁獲量の確定値	2017 年沖底漁獲量の確定
2018 年秋季の資源量確定値	2018 年秋季の資源量の追加
2018 年沖底漁獲量の暫定値	2018 年沖底漁獲量の暫定値の追加

評価対象年 (当初・再評価)	管理基準	F 値	資源量 (トン)	ABClimit (トン)	ABCtarget (トン)	漁獲量 (トン) (実際の F 値)
2018 年 (当初)	F40%SPR	0.058	9,758	520	420	
2018 年 (2018 年 再評価)	F40%SPR	0.058	10,754	570	460	
2018 年 (2019 年 再評価)	F40%SPR	0.058	10,732	570	460	559 (0.057)
2019 年 (当初)	F40%SPR	0.058	9,289	490	400	
2019 年 (2019 年 再評価)	F40%SPR	0.058	9,601	510	410	
2018 年の漁獲量は暫定値、ABC は 10 トン未満を四捨五入した値。						

当初と翌年の再評価時の資源量を比較した際、両年ともに資源量が増加しているのは、翌年に着底トロール調査による資源量の推定値が得られるためである。翌々年には、調査結果から翌年 1 月の資源量を求める際の漁獲量が確定するため、資源量が若干変化する。

6. ABC 以外の管理方策の提言

価格の安い小型魚（体長 15 cm 以下）を保護することで、親魚量の増加およびその後の加入量の増加が期待できる。また、小型魚が成長すれば単価の上昇も期待でき、漁獲開始年齢の引き上げはキチジの資源管理に有効な方策と考えられる（Noranartragoon et al. 2011）。

7. 引用文献

- Bograd, S. J., D. G. Foley, F. B. Schwing, C. Wilson, R. M. Laurs, J. J. Polovina, E. A. Howell and R. E. Brainard (2004) On the seasonal and interannual migrations of the transition zone chlorophyll front. *Geophys. Res. Lett.*, **31**, L17204.
- 深滝 弘 (1963) 太平洋北西部から採集されたキチジの浮性卵囊. 日水研報告, **11**, 91-100.
- 後藤友明 (2004) 岩手県沖合域に生息するキチジ *Sebastolobus macrochir* の年齢、成長、成熟および食性. 岩手水技セ研報, **4**, 39-47.
- 橋本良平 (1974) 東北海区漁場におけるマダラの食性と生息水深の変動に関する研究. 東北水研研報, **33**, 51-66.
- 服部 努 (1998) 東北太平洋岸沖におけるキチジの年齢と成長. 漁業資源研究会議底魚部会報, **1**, 3-10.
- 服部 努・成松庸二・伊藤正木・上田祐司・北川大二 (2006) 東北海域におけるキチジの資源量と再生産成功率の経年変化. 日水誌, **72**, 374-381.
- Hattori, T., Y. Narimatsu, M. Ito, Y. Ueda, K. Fujiwara and D. Kitagawa (2007) Growth changes in bighead thornyhead *Sebastolobus macrochir* off the Pacific coast of northern Honshu, Japan. *Fish. Sci.*, **73**, 341-347.
- 濱津友紀・服部 努 (2002) キチジ (太平洋北海域). 漁場生産力変動評価・予測調査報告

- 書, 北海道区水産研究所, 12-17.
- 濱津友紀・服部 努 (2003) キチジ (太平洋北海域). 漁場生産力変動評価・予測調査報告書, 北海道区水産研究所, 12-19.
- 濱津友紀・服部 努 (2004) キチジ (太平洋北海域). 漁場生産力変動評価・予測調査報告書, 北海道区水産研究所, 12-21.
- Ichii, T., K. Mahapatra, M. Sakai and D. Inagake (2006) Long-term changes in the stock abundance of neon flying squid, *Ommastrephes bartrammi*, in relation to climate change, the squid fishery, and interspecies interactions in the north Pacific. The role of squid in open ocean ecosystems, Report of a GLOBEC-CLIoTOP/PFRP workshop, 16-17 November 2006, Hawaii, USA, 31-32.
- 木下貴裕・國廣靖志・多部田 修 (1999) 標識放流に基づくオホーツク海南部におけるキチジの回遊. 日水誌, **65**, 73-77.
- 北川大二・橋本 惇・上野康弘・石田享一・岩切 潤 (1985) 三陸沖深海域におけるキチジの分布特性. 海洋科学技術センター試験研究報告, 107-117.
- Koya, Y. and T. Matsubara (1995) Ultrastructural observations on the inner ovarian epithelia of kichiji rockfish *Sebastolobus macrochir* with special reference to the production of gelatinous material surrounding the eggs. Bull. Hokkaido Natl. Fish. Res. Inst., **59**, 1-17.
- Koya, Y., T. Hamatsu and T. Matsubara (1995) Annual reproductive cycle and spawning characteristics of female kichiji rockfish *Sebastolobus macrochir*. Fish. Sci., **61**, 203-208.
- 國廣靖志 (1995) オホーツク海のキチジの漁業と生態. その2. 北水試だより, **29**, 14-22.
- 國廣靖志 (1996) オホーツク海で獲れた産卵中のキチジ (短報). 北水試研報, **48**, 27-29.
- 三河正男 (1952) 東北海区における底魚類の消化系と食性について. 第1報キチジ. 東北水研研報, **1**, 20-24.
- 三河正男 (1955) 東北海区における底魚類の消化系と食性について. 第3報アブラガレイ. 東北水研研報, **4**, 136-146.
- 三河正男・伊藤勝千代 (1981) キチジの成熟と産卵について. 漁業資源研究会議北日本底魚部会報, **16**, 42-52.
- Moser, H. G. (1974) Development and distribution of larvae and juveniles of *Sebastolobus* (Pisces; Family Scorpaenidae). Fish. Bull., **72**, 865-884.
- Noranartragoon, P., Y. Ueda, T. Hattori and T. Matsuishi (2011) Value-per-recruit analysis of bighead thornyhead *Sebastolobus macrochir* caught off the Pacific coast of northern Honshu, Japan. Fish. Sci., **77**, 497-502.
- Sakaguchi, S. O., K. Takishita, T. Goto, H. Shibata, S. Kojima, S. Tsuchida, H. Kitazato and K. Fujikura (2014) Analyses of age and population genetic structure of the broadbanded thornyhead *Sebastolobus macrochir* in North Japan suggest its broad dispersion and migration before settlement. J. Oceanogr., **70**, 457-462.
- 時岡 駿・成松庸二・柴田泰宙・鈴木勇人・森川英祐・永尾次郎・矢野寿和 (2019) 2018年の底魚類現存量調査結果. 東北底魚研究, **39**, 印刷中.
- 田中昌一 (1960) 水産生物の Population Dynamics と漁業資源管理. 東海水研研報, **28**, 1-200.
- 東北区水産研究所八戸支所 (1956) 東北海区の底魚. 東北水研叢書, **6**, 61-68.

(執筆者：森川英祐、成松庸二、柴田泰宙、鈴木勇人、時岡 駿、永尾次郎)

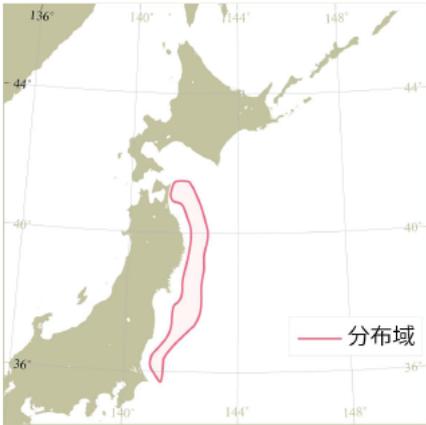


図1. 太平洋北部におけるキチジの分布

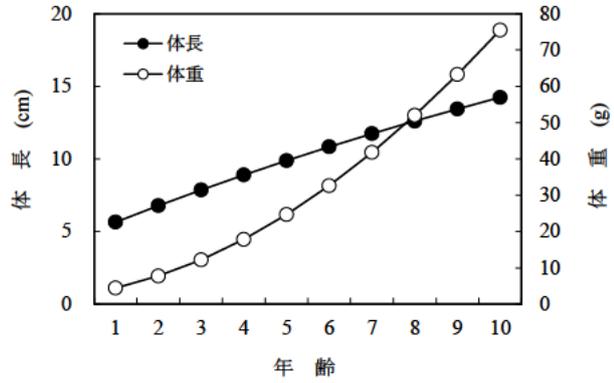


図2. 太平洋北部におけるキチジの成長

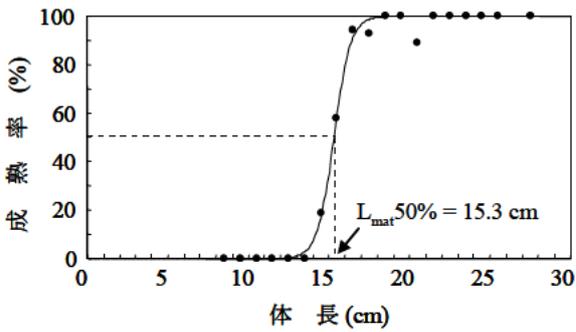


図3. 太平洋北部におけるキチジ雌の体長-成熟割合の関係

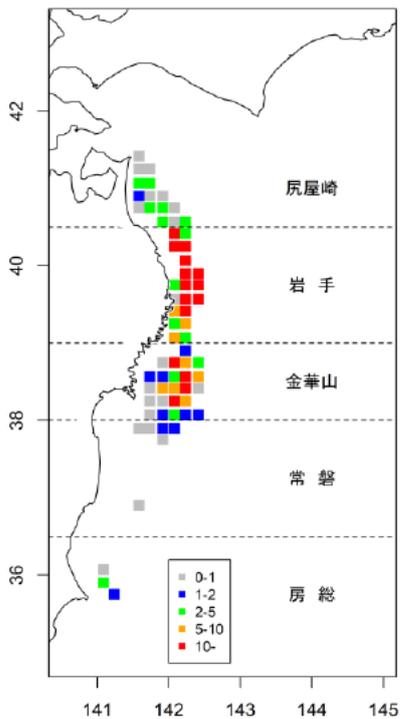


図4. 2017年の沖底によるキチジの漁場分布図
単位はトン。

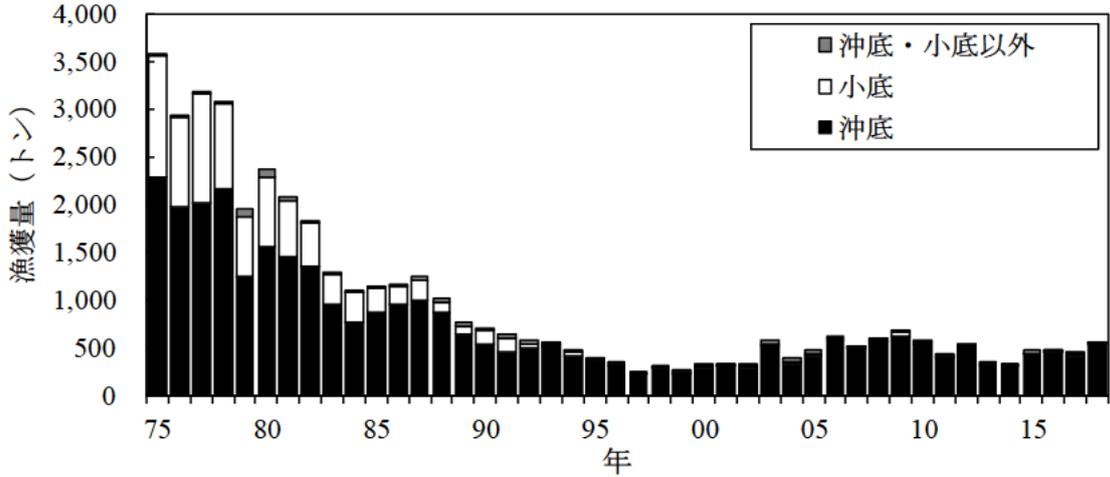


図5. 太平洋北部におけるキチジ漁獲量の推移
2016年の値は暫定値。

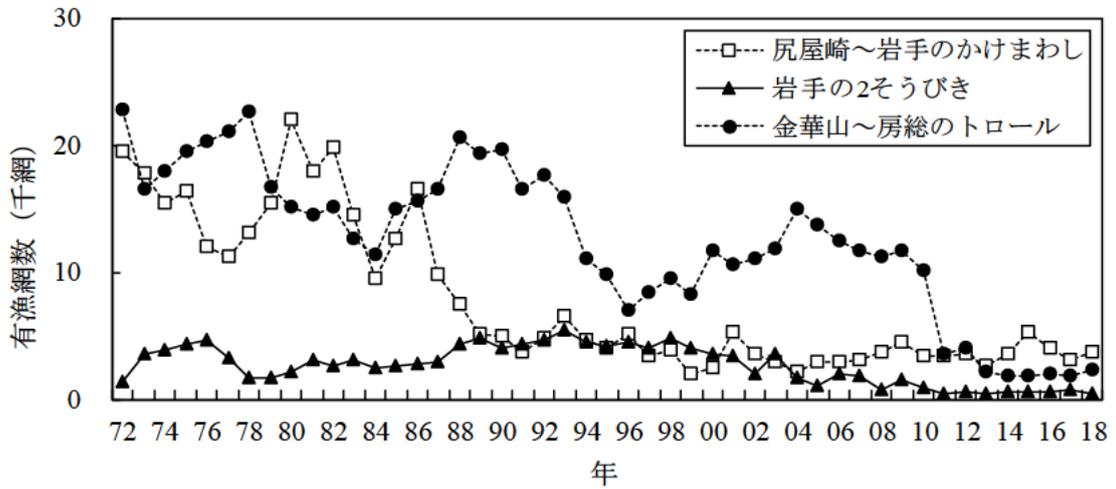


図6. 沖底による漁獲努力量の経年変化
2018年の値は暫定値である。

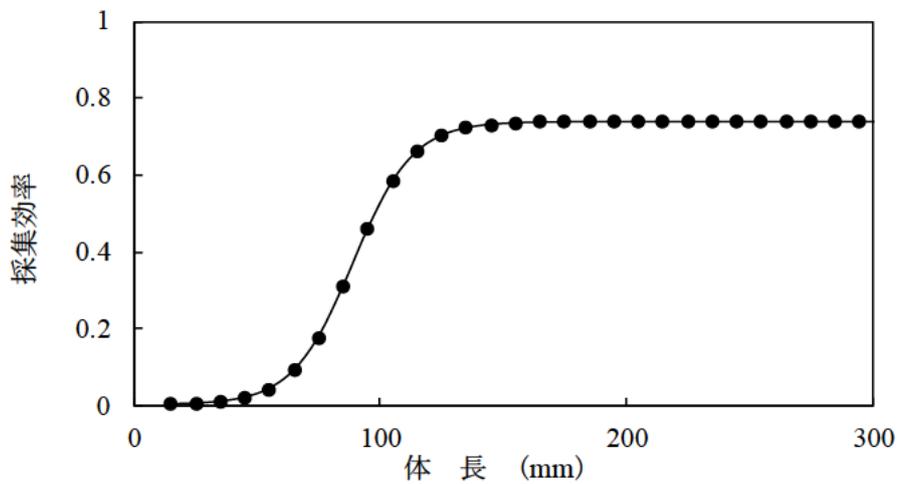


図7. 体長と採集効率の関係

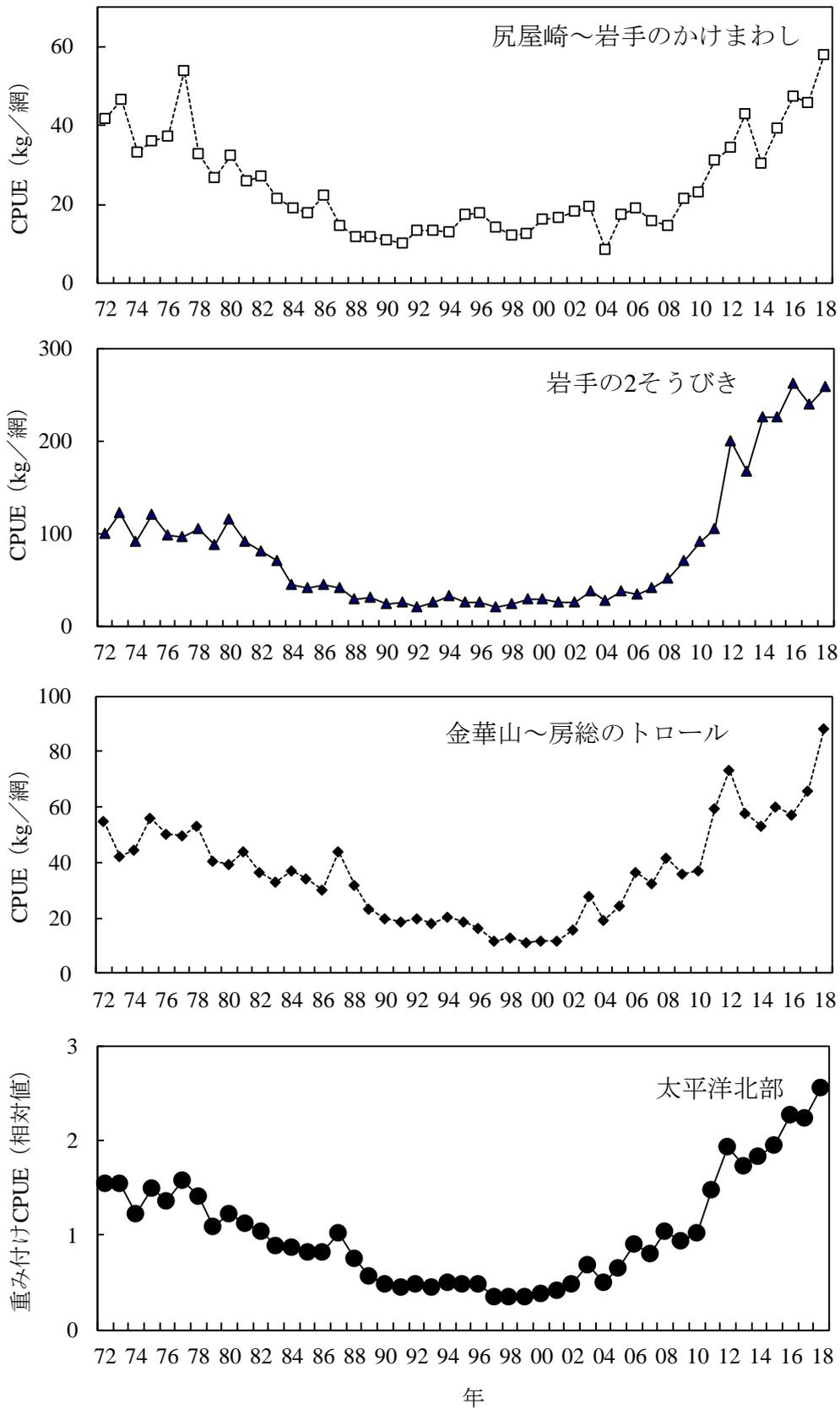


図8. 沖底によるCPUEおよび重み付けCPUEの経年変化
2018年の値は暫定値である。

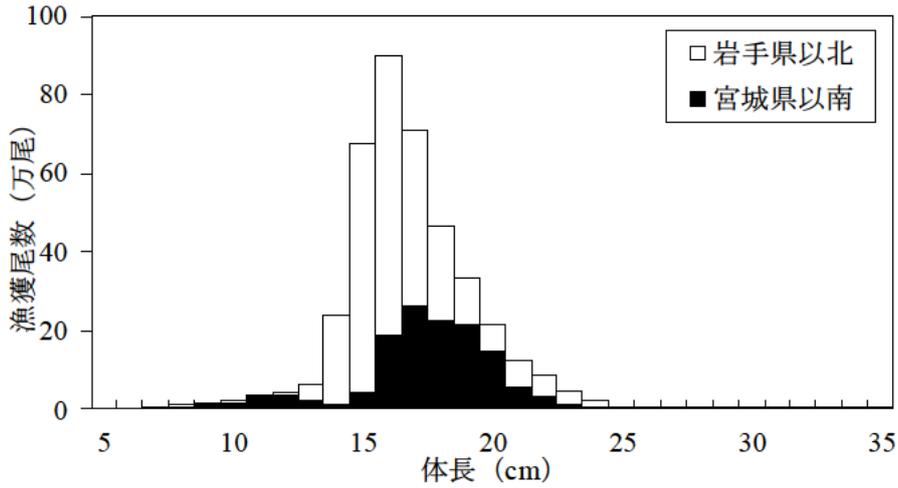


図9. 2018年の漁獲物の体長組成

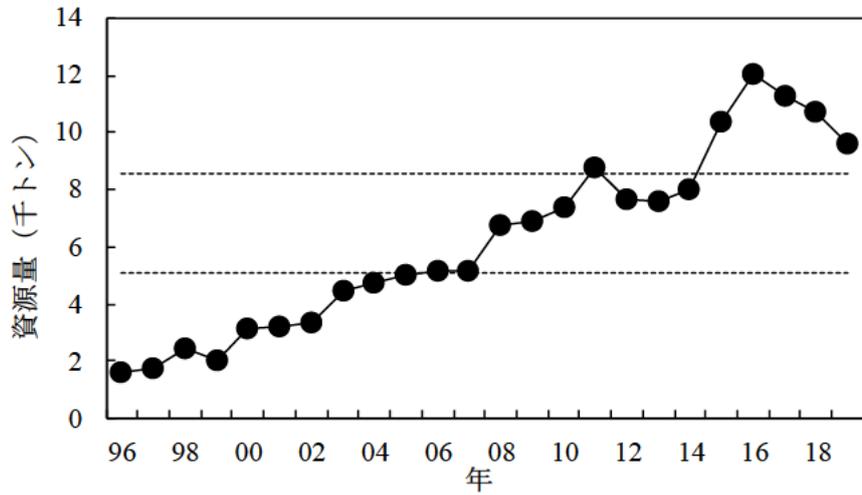


図10. キチジの資源量 (1月時点) の推移 破線は水準の境界を示す。

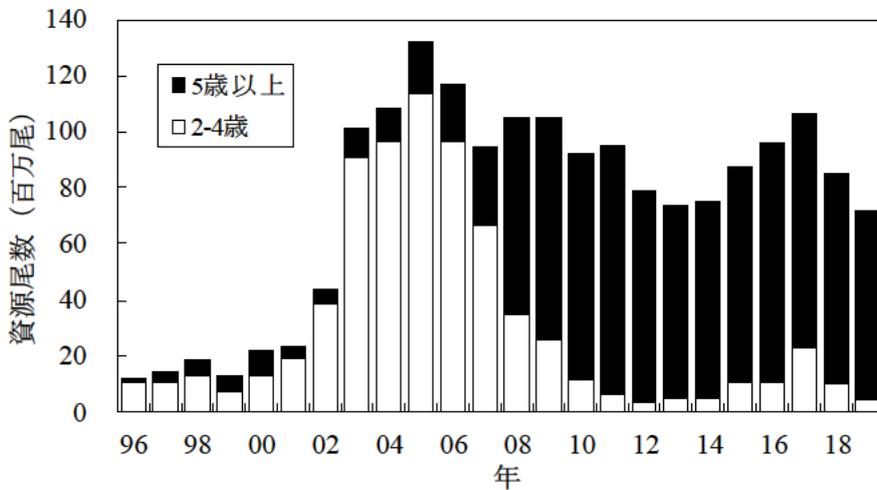


図11. キチジの資源尾数 (1月時点) の推移

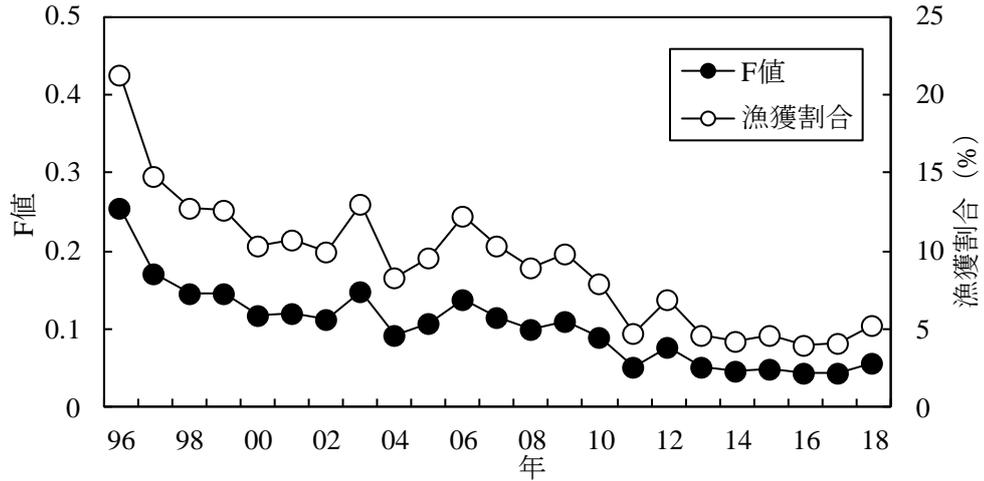


図12. F値および漁獲割合の推移
F値は2歳魚以上の全年齢群で同値として計算した。

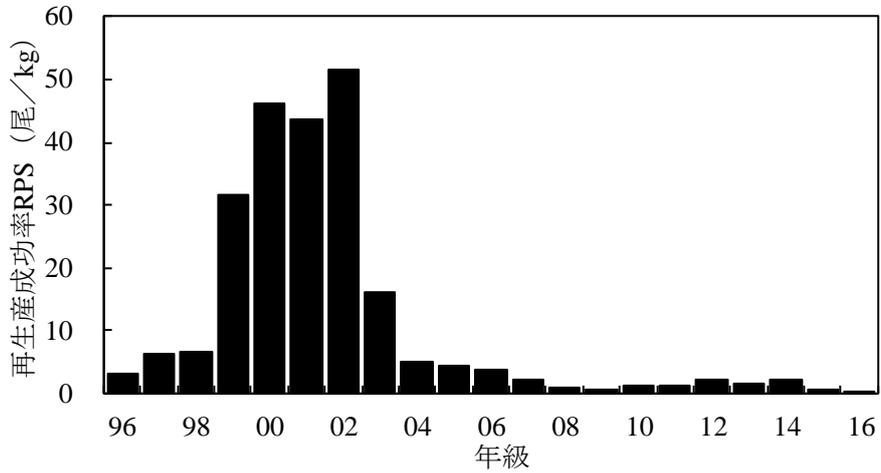


図13. 再生産成功率 (RPS) の推移
雌親魚1 kgあたりの2歳魚尾数として計算した。

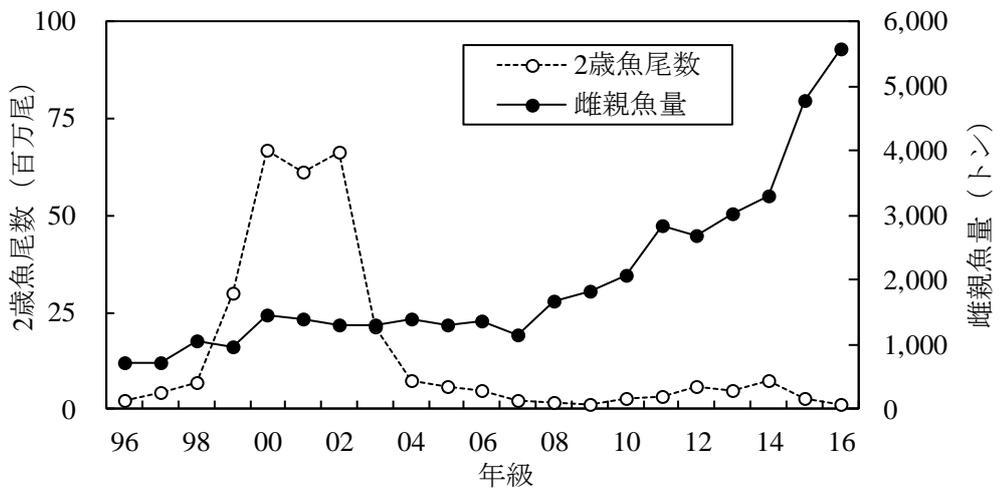


図14. 雌親魚量と加入量の推移

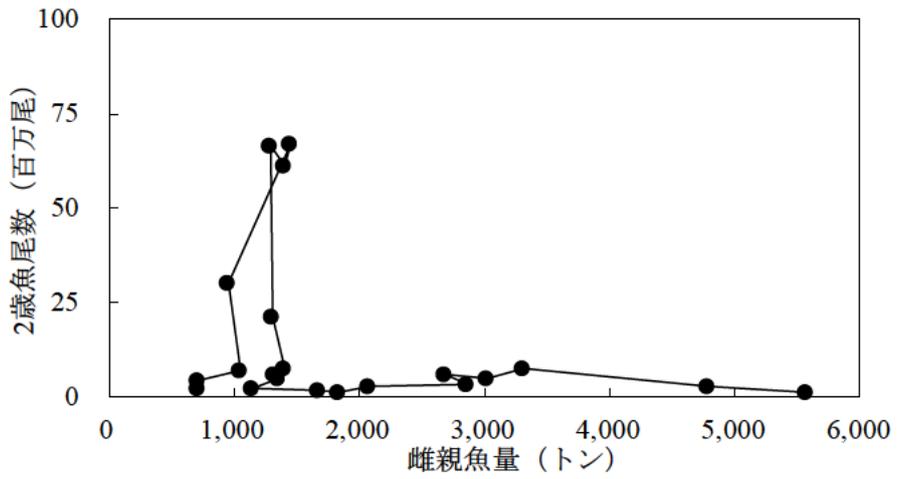


図15. 再生産関係

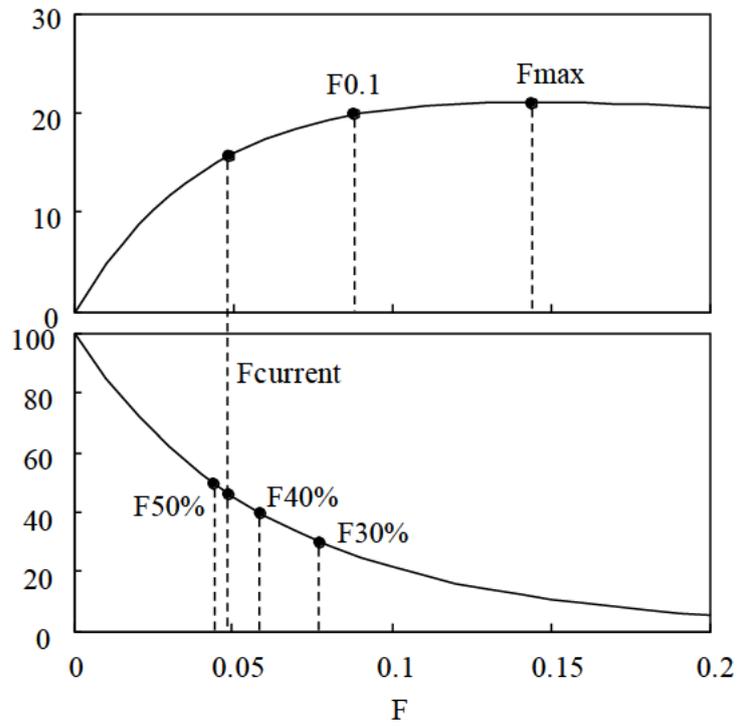


図16. 様々なFとYPR曲線および%SPR曲線との関係

表1. 太平洋北部における漁業種類別のキチジの漁獲量（トン）

	1975	1976	1977	1978	1979	1980	1981	1982	1983	1984	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999
沖底	2,296	1,987	2,015	2,164	1,259	1,567	1,451	1,350	960	769	881	960	1,003	875	657	541	456	507	518	424	357	320	229	286	232
小底	1,277	926	1,152	897	618	740	601	463	318	315	246	198	198	116	72	140	155	43	21	26	16	8	7	14	10
刺網	6	8	3	9	17	19	2	7	1	0	0	1	1	0	0	4	0	0	0	0	0	3	16	0	0
延縄	6	8	7	19	63	53	36	25	9	5	9	14	42	29	52	19	29	39	9	6	6	9	6	10	16
定置	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
その他	0	0	0	0	0	0	1	1	2	1	1	3	1	0	0	0	1	0	0	1	0	1	0	1	0
合計	3,585	2,929	3,177	3,089	1,957	2,379	2,091	1,846	1,290	1,090	1,137	1,176	1,245	1,020	781	704	641	589	548	457	379	342	258	311	259

	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
沖底	282	304	291	514	332	427	584	502	563	631	545	390	524	316	319	448	458	427	537
小底	22	17	12	36	23	18	15	8	19	30	25	18	5	26	2	1	0	2	4
刺網	0	0	1	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
延縄	20	20	27	29	39	30	16	13	14	11	12	2	3	6	10	14	12	21	14
定置	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
その他	1	1	1	2	1	0	11	5	9	7	9	7	1	4	11	13	14	10	4
合計	326	342	333	583	397	475	626	529	605	680	591	417	534	352	343	475	484	460	559

沖底の値は漁場別漁獲統計資料による（2018年の値は暫定値）。2005年以前の沖底以外の値は農林統計、2006年以降の値は水試調べによる。

震災以降の福島県では、試験操業において沖底と小底は「底びき網」として合計されている。「底びき網」から漁場別漁獲統計資料の値を引いたものを小底の値として集計した。

表2. 沖合底びき網漁業による小海区別のキチジの漁獲量（トン）

小海区	1975	1976	1977	1978	1979	1980	1981	1982	1983	1984	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999
尻屋崎	137	57	39	54	50	186	100	260	124	110	101	252	70	49	44	31	21	41	66	38	54	76	40	39	20
岩手	989	844	895	605	518	768	639	498	404	188	232	239	207	167	164	118	125	120	160	164	121	129	92	120	121
金華山	426	361	303	353	231	219	198	172	165	164	240	258	358	319	168	165	126	117	122	102	75	58	48	64	41
常磐	530	532	630	773	348	261	264	285	175	176	156	119	296	271	218	155	139	176	128	96	92	53	45	59	44
房総	215	193	146	379	112	133	251	135	91	131	152	92	72	70	63	73	45	53	42	25	15	5	4	3	6
合計	2,296	1,987	2,015	2,164	1,259	1,567	1,451	1,350	960	769	881	960	1,003	875	657	541	456	507	518	424	357	320	229	286	232

小海区	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
尻屋崎	35	80	60	48	13	44	47	37	48	81	66	89	87	64	67	103	64	36	99
岩手	108	95	56	138	52	46	75	86	48	119	90	61	136	107	150	236	280	268	241
金華山	61	58	62	124	81	120	155	85	157	140	116	169	283	128	72	94	98	105	146
常磐	70	61	101	181	149	163	215	226	252	256	236	48	10	4	3	5	7	5	6
房総	9	9	12	24	36	55	91	69	58	35	37	23	9	13	27	10	8	14	46
合計	282	304	291	514	332	427	584	502	563	631	545	390	524	316	319	448	458	427	537

値は漁場別漁獲統計資料による（2018年の値は暫定値）。

表 3. 沖底の小海區別漁獲努力量（キチジの有漁網数）の推移

年	尻屋崎 かけまわし	岩手 かけまわし	岩手 2そうびき	金華山 トロール	常磐 トロール	房総 トロール
1972	3,269	16,299	1,350	7,106	13,610	2,113
1973	1,931	15,896	3,569	4,331	10,101	2,114
1974	1,615	13,800	3,871	4,691	9,793	3,426
1975	2,425	14,039	4,305	5,706	10,240	3,597
1976	1,420	10,569	4,561	4,982	12,029	3,364
1977	614	10,625	3,203	6,107	12,265	2,753
1978	814	12,338	1,739	5,853	12,426	4,411
1979	2,097	13,359	1,693	5,752	8,231	2,746
1980	5,281	16,788	2,073	4,646	5,993	4,501
1981	3,649	14,276	3,019	3,694	4,751	6,089
1982	6,658	13,160	2,613	3,423	7,180	4,474
1983	3,339	11,162	3,028	3,944	5,191	3,471
1984	3,218	6,252	2,461	3,652	4,000	3,770
1985	4,093	8,509	2,618	5,886	4,621	4,505
1986	8,012	8,541	2,691	7,475	4,367	3,724
1987	3,667	6,187	2,924	7,129	6,554	2,822
1988	3,527	3,936	4,364	8,873	9,218	2,481
1989	2,278	2,896	4,783	9,012	7,657	2,734
1990	1,888	3,098	4,086	9,232	7,604	2,829
1991	1,327	2,356	4,302	7,696	6,809	2,034
1992	2,112	2,613	4,619	7,187	7,535	2,922
1993	3,834	2,634	5,444	6,206	7,149	2,589
1994	2,424	2,156	4,458	4,366	5,268	1,406
1995	2,895	1,141	4,149	4,652	4,311	778
1996	3,946	1,110	4,431	3,508	3,149	350
1997	2,345	1,093	3,943	3,838	4,035	474
1998	2,465	1,382	4,828	4,603	4,649	311
1999	1,164	878	3,958	4,662	2,982	527
2000	1,678	771	3,536	5,928	5,174	556
2001	4,338	892	3,425	5,157	4,523	931
2002	2,890	684	1,974	5,181	4,830	1,026
2003	2,057	800	3,511	4,853	5,678	1,300
2004	1,462	719	1,679	6,226	6,743	1,983
2005	2,034	858	1,039	5,342	6,623	1,708
2006	2,252	676	1,911	5,510	5,174	1,799
2007	2,374	727	1,754	3,287	5,475	2,900
2008	2,881	806	760	4,133	5,214	1,893
2009	3,828	705	1,459	4,458	5,735	1,439
2010	3,020	415	820	3,640	4,744	1,687
2011	3,016	356	421	1,910	737	889
2012	2,612	933	500	3,150	207	606
2013	1,867	763	346	1,553	135	471
2014	2,516	980	492	891	92	891
2015	4,006	1,196	588	1,211	135	460
2016	2,789	1,145	606	1,354	162	462
2017	2,021	1,085	671	1,404	132	345
2018	2,747	960	478	1,604	130	502

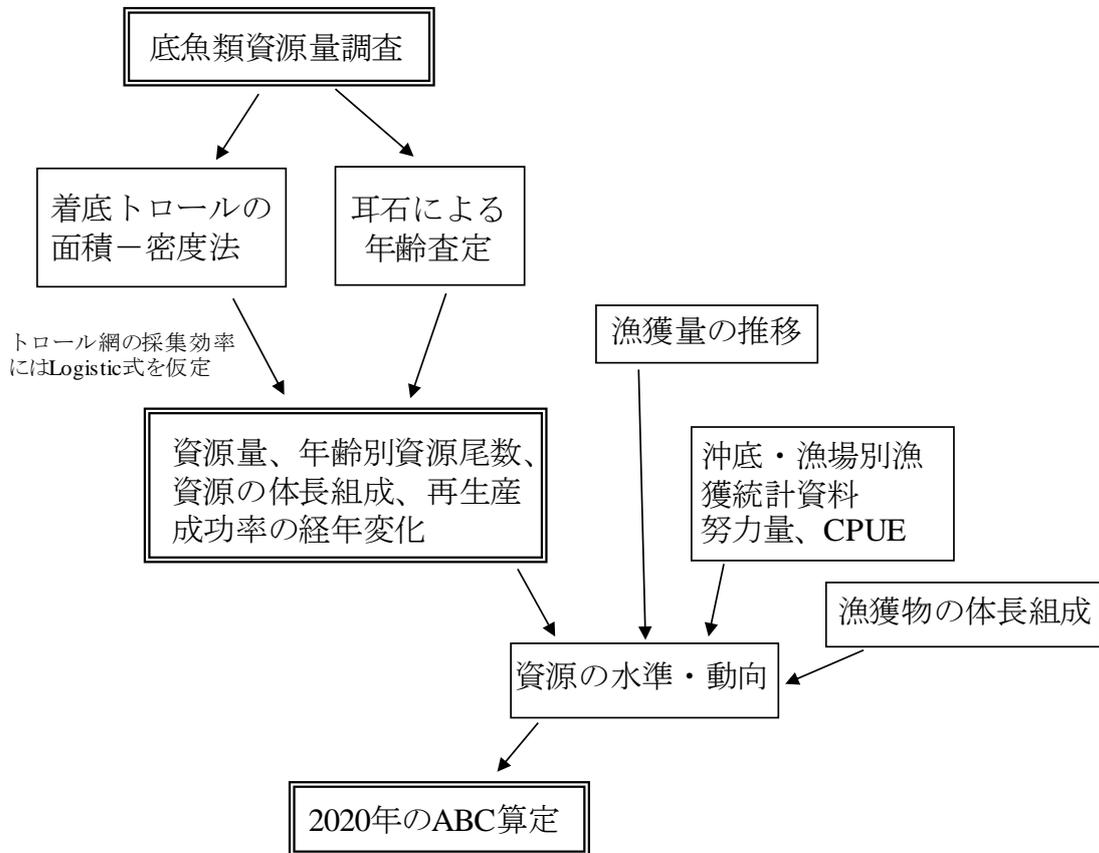
値は漁場別漁獲統計資料による（2018年の値は暫定値）。

表 4. 沖底の小海區別、漁法別の CPUE (kg/網) の推移

年	尻屋崎 かけまわし	岩手 かけまわし	岩手 2そうびき	金華山 トロール	常磐 トロール	房総 トロール
1972	44.1	41.4	100.6	59.3	53.1	49.1
1973	45.6	46.8	123.4	50.2	39.3	40.6
1974	48.8	31.2	90.7	44.4	42.1	53.4
1975	55.2	32.9	120.8	64.1	51.6	55.2
1976	37.0	37.5	98.2	68.0	42.8	52.6
1977	34.1	55.3	96.2	49.1	50.9	47.6
1978	59.8	30.9	105.6	47.2	54.5	57.5
1979	22.0	27.6	88.2	39.4	40.8	40.7
1980	34.6	31.6	115.1	44.7	43.1	29.5
1981	27.4	25.5	90.7	43.9	49.8	39.0
1982	39.0	21.3	81.4	36.9	39.7	30.1
1983	37.1	16.9	71.1	38.3	33.3	26.2
1984	32.0	12.2	45.3	38.6	37.9	34.2
1985	24.7	14.7	40.8	35.8	32.9	33.8
1986	31.4	14.0	44.4	34.4	27.2	24.7
1987	16.5	13.6	42.1	49.8	45.2	25.3
1988	13.9	9.6	29.5	35.6	29.4	28.3
1989	19.2	5.9	30.6	18.6	28.5	23.1
1990	16.5	7.5	23.2	17.8	20.3	25.6
1991	15.5	7.2	25.1	16.4	20.4	22.2
1992	19.2	9.0	21.0	16.3	23.3	18.2
1993	17.1	8.0	25.4	19.7	18.0	16.2
1994	15.7	9.7	32.1	23.3	18.1	17.8
1995	18.6	14.0	25.5	16.1	21.4	18.5
1996	19.3	13.0	25.8	16.4	16.8	13.2
1997	17.0	7.9	21.2	12.4	11.2	8.2
1998	16.0	5.6	23.3	13.9	12.6	9.6
1999	17.4	5.9	29.2	8.7	14.6	12.2
2000	20.8	6.4	29.0	10.2	13.5	16.4
2001	18.5	6.6	26.1	11.1	13.6	10.0
2002	20.7	7.0	26.0	11.5	21.0	11.7
2003	23.2	9.7	37.0	25.1	32.2	18.6
2004	9.0	6.9	28.2	13.6	24.7	19.1
2005	21.7	8.0	38.0	21.6	24.6	31.8
2006	20.8	12.9	34.8	27.1	41.3	50.7
2007	15.4	17.3	41.7	25.8	41.3	23.8
2008	15.8	10.5	51.5	37.9	48.3	30.9
2009	21.3	22.8	70.2	28.3	44.6	24.3
2010	21.9	33.6	92.2	27.2	49.8	21.8
2011	29.5	47.5	105.8	73.2	64.8	25.6
2012	33.2	38.5	199.5	86.1	46.8	15.6
2013	34.2	64.1	168.2	69.3	30.7	26.9
2014	26.8	39.5	225.9	78.0	37.6	29.9
2015	25.6	85.9	226.6	77.6	39.6	21.3
2016	23.1	106.3	261.7	72.6	43.5	16.5
2017	17.6	98.4	240.0	74.9	35.0	40.4
2018	35.9	121.8	258.6	90.8	46.6	90.9

値は漁場別漁獲統計資料による（2018年の値は暫定値）。

補足資料1 資源評価の流れ



補足資料 2 資源計算方法

キチジ太平洋北部の資源量推定は、調査船による着底トロール調査の結果（補足資料 3）を用いた面積－密度法により行われている。北緯 38°50′で調査海域を南北に分け、2018 年は 100～200 m、200～300 m、300～400 m、400～500 m、500～600 m、600～700 m、700～800 m および 800～1,000 m の 8 水深帯、16 層 (i) に海域を層化した。各調査点 (j) において網着底から網離底までの距離を求め、それを曳網距離とした。オッターボード間隔を測定し、漁具構成から得られたオッターボード間隔と袖先間隔の比 (1 : 0.258) により袖先間隔を推定し、曳網距離に袖先間隔を乗じて i 層 j 地点の曳網面積 (a_{ij}) を求めた。i 層 j 地点の漁獲重量あるいは漁獲尾数 (C_{ij}) を a_{ij} で除し、i 層 j 地点の密度 (d_{ij}) を算出し、その平均を i 層における密度 d_i とした。また、 n_i は i 層の調査地点数を表す。さらに、i 層の平均密度 (d_i) に i 層の海域面積 (A_i) を乗じ、i 層の資源量あるいは資源尾数 (B_i) を求め、これらを合計することにより東北海域全体のキチジの資源量あるいは資源尾数 (B) とした。なお、ここで示す資源量あるいは資源尾数は、採集効率（網口の前にいる魚の何割が漁獲されるかを示す係数）を 1 と仮定している。

$$d_{ij} = \frac{C_{ij}}{a_{ij}} \quad (1)$$

$$d_i = \frac{1}{n_i} \sum_{j=1}^{n_i} d_{ij} \quad (2)$$

$$B_i = A_i \cdot d_i \quad (3)$$

$$B = \sum B_i \quad (4)$$

資源尾数については、体長 1 cm ごとの計算も行い、資源全体の体長組成を求めた。i 層の密度の標準偏差 (SD_{d_i}) を求め、 n_i と A_i により i 層における資源量あるいは資源尾数の標準誤差 (SE_{B_i}) を計算し、調査海域全体における資源の標準誤差 (SE) および変動係数 (CV, %) を下式により求めた（結果は補足資料 3 に記述）。なお、信頼区間の上限と下限は、 $\exp(\log(B) + 1.96 \times CV)$ および $\exp(\log(B) - 1.96 \times CV)$ により求めた。また、ここで得られる CV とは、採集効率を 1 と仮定した場合の資源量および資源尾数に対する値であり、採集効率の推定誤差は含んでいない。

$$SE_{B_i} = \frac{A_i \cdot SD_{d_i}}{\sqrt{n_i}} \quad (5)$$

$$SE = \sqrt{\sum SE_{B_i}^2} \quad (6)$$

$$CV = SE / B \quad (7)$$

資源評価に用いた年齢別資源尾数および資源量は、Logistic 式による採集効率を仮定して計算した。採集効率は、渡部ら（2002）のデータを用いて、曳航式深海用ビデオカメラで撮影された映像による尾数密度と、着底トロール調査による尾数密度との比較によって推定した。映像による尾数密度を真値として、この値と 1 cm 刻みの体長組成に対する採集効率で補正した着底トロール調査による尾数密度との差が最小になるように係数を求めた。得られた体長と採集効率の関係式を下記に示す（SL は標準体長、単位は mm）。

$$\text{Net efficiency} = \frac{0.738}{1 + 1,525 \times e^{(-0.0824 \times SL)}}$$

自然死亡係数の算定には、寿命を 20 歳として田内・田中の式（田中 1960）を用いた（ $M = 2.5 / 20 = 0.125$ ）。各年の F および M を用い、秋季の年齢別資源尾数から 2 ヶ月分の漁獲および自然死亡分を引いて翌年 1 月時点の資源尾数を求めた（補足資料 4 の補足表 4-7）。なお、すべての年齢で F は同値と仮定し、以下の式を用いて漁獲割合（E）から F を求めた。

$$F = -\ln\left(1 - E \times e^{M/2}\right)$$

漁獲物の体長組成から 1 歳魚の漁獲は少ないと考えられるため、漁獲対象資源は 2 歳魚（2 歳 9 ヶ月）以上とした。各年、各年齢における平均体長（補足資料 4 の補足表 4-2）から体長-体重関係を用いて年齢別平均体重（補足資料 4 の補足表 4-3）を求め、それに乗じて年齢別資源重量を求めた（補足資料 4 の補足表 4-8）。なお、冬季の成長は悪いと考えられることから（服部 1998）、体長は 10~11 月時点のものを翌年 1 月のものとみなせると仮定した。

引用文献

- 渡部俊広・渡辺一俊・北川大二（2002）ズワイガニ類とキチジに対するトロール網の採集効率（要旨）．東北底魚研究, **22**, 32-33.
- 田中昌一（1960）水産生物の Population Dynamics と漁業資源管理．東海水研研報, **28**, 1-200.
- 服部 努（1998）東北太平洋岸沖におけるキチジの年齢と成長．漁業資源研究会議底魚部会報, **1**, 3-10.

補足資料3 調査船調査の概要及び結果

(1) 2018年の若鷹丸による底魚類資源量調査の概要

若鷹丸による底魚類資源量調査は、1995年以降、秋季（10～11月）に着底トロールを用いて実施されている。この調査で使用している着底トロール網の構成は、袖網長 13.0 m、身網長 26.1 m、網口幅が 5.4 m であり、コッドエンドの長さは 5.0 m である。コッドエンドは3重構造となっており、内網の目合が 50 mm、外網の目合が 8 mm 角、すれ防止用の最も外側を覆う網の目合が 60 mm であり、小型個体も外網により採集可能な構造となっている。1回の曳網時間は原則として 30 分間とし、全ての曳網は日の出から日没までの間に船速 2.5～3.5 ノットで行われている。船上で各々の曳網で採集されたキチジの尾数と重量を計数・計量した後、標準体長を計測し、年齢査定用の耳石の採取を実施している。下記に 2017 年に行った調査結果の概要を示す。

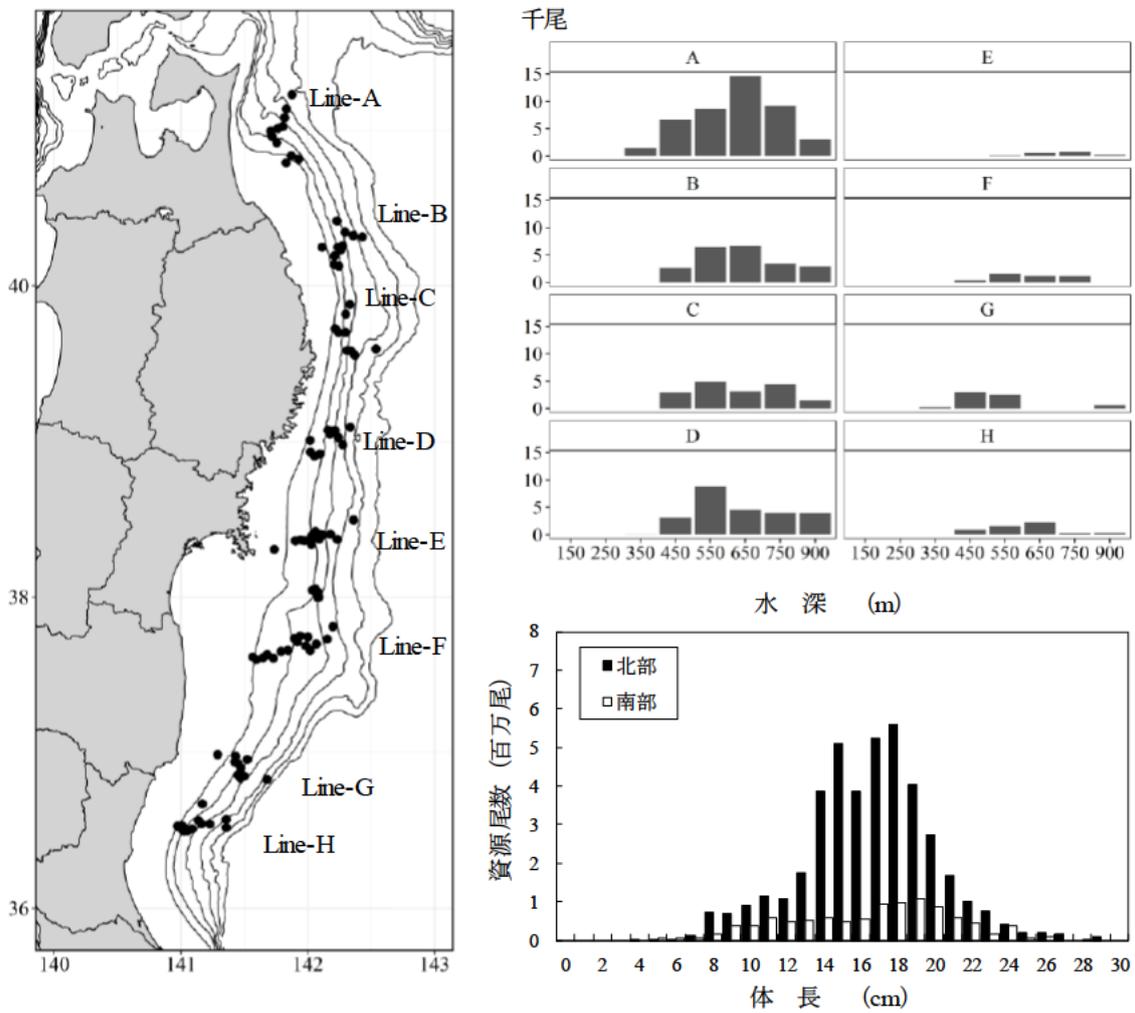
2018年10～11月の調査では、水深 150～900 m において計 107 地点の着底トロール調査を実施した（補足図 3-1）。水深帯別の分布密度をみると、キチジは主に水深 450～750 m に分布していた。面積-密度法（補足資料 2）により採集効率を 1 とした場合の体長組成を調べた結果、東北南部海域に比べて東北北部海域で体長 15 cm 前後の個体が多いことが明らかとなった。

(2) 若鷹丸による底魚類資源量調査（1995年以降の結果）

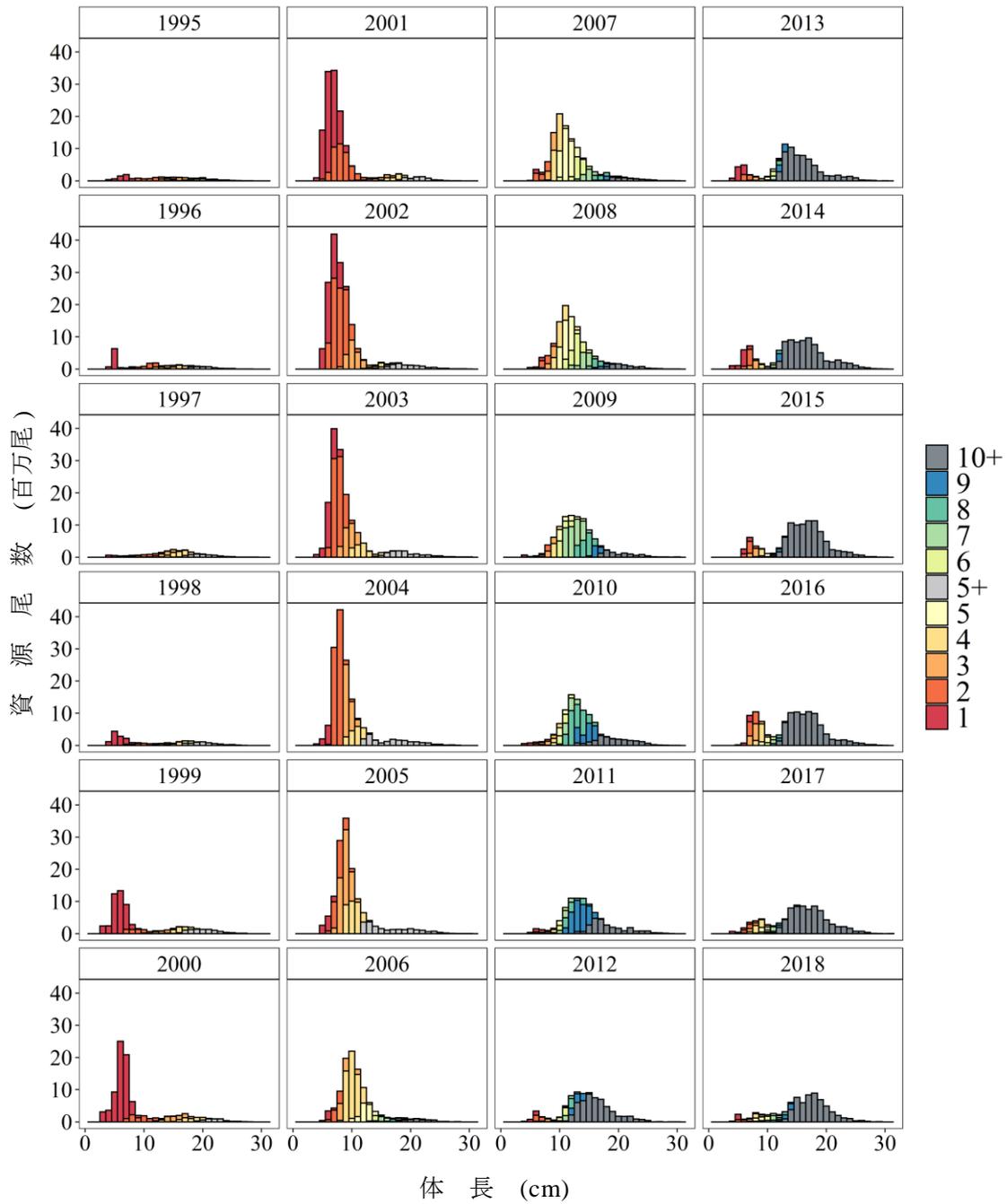
調査船調査は、1995年以降、秋季（10～11月）に着底トロールを用いて実施されており、太平洋北部全体のキチジの資源量および資源尾数の推定に用いられている。ここでは、資源量および資源尾数に関する結果（調査地点数、資源量および資源尾数の変動係数 CV、標準誤差 SE、信頼区間）を補足表 3-1 に示した。なお、本表には 0 歳魚の資源尾数を含むため、本文で用いた年齢別資源尾数の合計とは完全には一致しない。

(3) Logistic 式から得られた採集効率を用いた場合の資源の推移

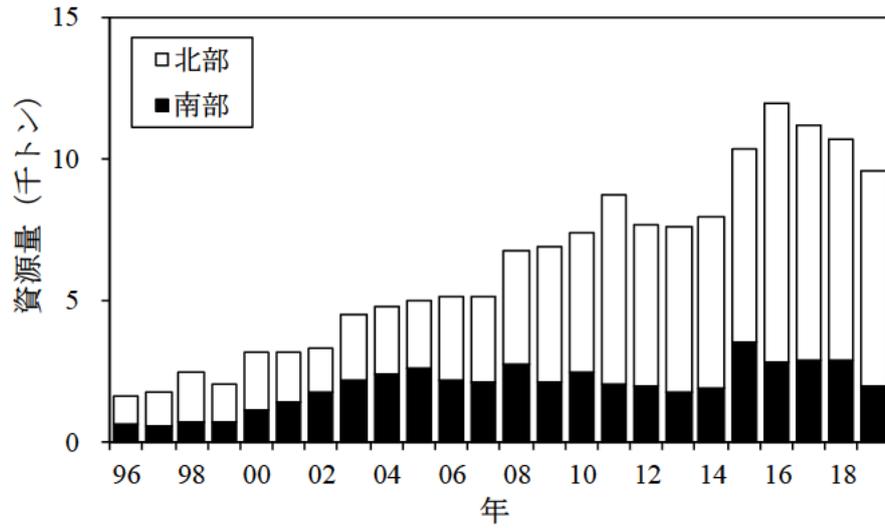
Logistic 式から得られた採集効率を用いた場合の資源の年齢別体長組成（補足図 3-2）および太平洋北部を北部と南部に分けた資源量の推移（補足図 3-3）を示した。



補足図 3-1. 2018 年 10～11 月の資源量調査における曳網地点 (左)、キチジの分布密度 (右上、曳網 1 km² あたり採集尾数で示す) および東北北部海域・南部海域における体長組成 (右下) ここでは、採集効率= 1 で一定とした。



補足図 3-2. Logistic 式から得られた採集効率を用いた場合の資源の年齢別体長組成 (10~11 月時点) ここでは、1995~2005 年は 5 歳魚以上をプラスグループ (5+)、2006 年以降は 10 歳魚以上をプラスグループ (10+) とした。



補足図3-3. 太平洋北部の南北別のキチジの資源量 (1月時点)
 Logistic式から得られた採集効率を用いた。

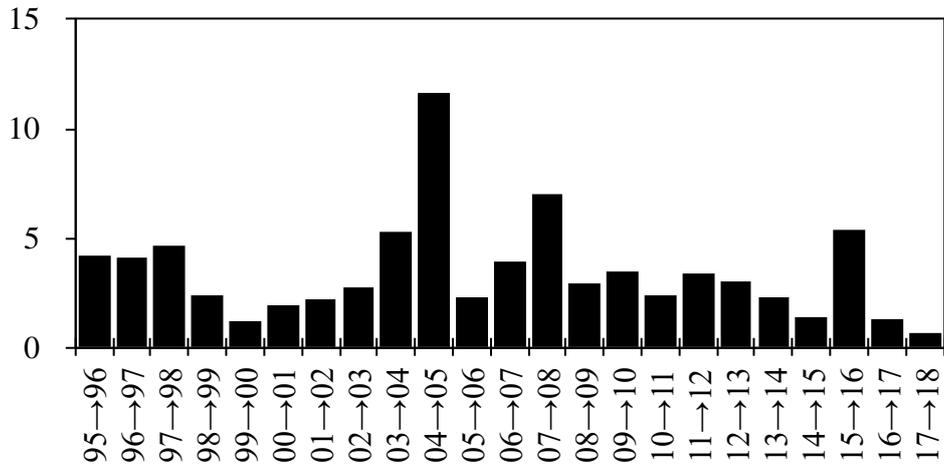
補足表 3-1. 若鷹丸による秋季の底魚類資源量調査により得られたキチジの資源量および資源尾数の経年変化（着底トロールの面積-密度法、採集効率を一定の1とした場合）

年	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002
調査地点数	57	57	60	61	59	74	71	75
資源量（トン）	1,422	1,523	1,824	1,597	2,503	2,588	2,564	3,082
資源量のCV	0.18	0.18	0.09	0.13	0.14	0.17	0.13	0.15
資源量のSE（トン）	256	271	168	212	355	434	340	453
95%信頼区間（上限）、トン	2,760	2,941	2,591	2,629	4,257	4,805	4,213	5,322
95%信頼区間（下限）、トン	636	685	1,239	900	1,349	1,236	1,450	1,630
資源尾数（千尾）	9,973	11,277	14,273	10,780	19,426	24,878	37,433	58,117
資源尾数のCV	0.21	0.27	0.14	0.16	0.16	0.20	0.18	0.21
資源尾数のSE（千尾）	2,122	3,059	2,036	1,697	3,165	4,934	6,669	12,408
95%信頼区間（上限）、千尾	21,614	29,770	24,331	19,351	35,563	51,279	72,053	126,104
95%信頼区間（下限）、千尾	3,758	2,974	7,674	5,396	9,454	10,165	16,962	21,880

年	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010
調査地点数	100	145	150	146	150	148	134	124
資源量（トン）	3,212	2,915	3,771	3,616	4,698	5,231	5,167	6,419
資源量のCV	0.12	0.11	0.09	0.11	0.10	0.07	0.07	0.08
資源量のSE（トン）	399	313	344	401	485	355	376	486
95%信頼区間（上限）、トン	5,108	4,353	5,314	5,474	6,917	6,770	6,820	8,565
95%信頼区間（下限）、トン	1,896	1,865	2,590	2,276	3,059	3,971	3,833	4,702
資源尾数（千尾）	55,001	55,657	65,457	59,473	68,385	70,484	64,991	68,312
資源尾数のCV	0.13	0.15	0.12	0.13	0.13	0.08	0.08	0.08
資源尾数のSE（千尾）	7,246	8,529	7,882	8,027	8,613	5,874	5,233	5,652
95%信頼区間（上限）、千尾	89,861	96,644	102,441	97,979	109,142	96,546	88,237	93,519
95%信頼区間（下限）、千尾	31,353	29,162	39,496	33,574	40,237	50,084	46,651	48,556

年	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
調査地点数	124	101	113	110	122	121	101	107
資源量（トン）	6,233	5,930	6,470	8,460	9,739	8,693	8,665	7,441
資源量のCV	0.08	0.09	0.07	0.10	0.11	0.10	0.08	0.09
資源量のSE（トン）	526	552	475	852	1,083	858	655	696
95%信頼区間（上限）、トン	8,585	8,438	8,558	12,369	14,786	12,612	11,562	10,605
95%信頼区間（下限）、トン	4,398	4,024	4,787	5,555	6,101	5,763	6,348	5,040
資源尾数（千尾）	57,113	53,050	54,354	61,381	67,816	70,670	60,193	51,264
資源尾数のCV	0.10	0.09	0.09	0.08	0.11	0.16	0.09	0.10
資源尾数のSE（千尾）	5,497	4,664	4,772	5,082	7,625	11,442	5,556	5,199
95%信頼区間（上限）、千尾	82,135	74,063	75,813	84,078	103,429	128,211	85,369	75,175
95%信頼区間（下限）、千尾	38,267	36,834	37,786	43,597	42,245	34,942	41,011	33,531

補足資料4 着底トロールによる面積-密度法を用いた資源量推定



補足図4-1. 採集効率を一定の1とした場合の各年の2歳魚尾数と前年の1歳魚尾数の比率

補足表 4-1. 採集効率一定の 1 とした場合の年齢別資源尾数 (10-11 月時点、単位：千尾)

年齢	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
1	710	537	304	1,065	3,759	7,838	11,868	7,284	3,745	628	834	376	229	241	123	123	132	173	481	711	356	420	190	88
2	3,109	2,964	2,177	1,415	2,482	4,380	14,701	26,215	19,633	19,766	7,331	1,887	1,457	1,598	702	424	292	441	521	1,116	961	1,911	527	131
3	3,157	2,107	2,901	1,224	2,241	5,354	2,891	13,827	12,265	16,999	22,385	4,510	3,381	2,194	1,504	917	413	410	373	1,140	1,083	2,577	647	344
4	2,009	2,725	4,781	2,557	3,829	3,903	3,489	2,612	9,852	10,527	18,813	32,080	12,185	10,027	2,534	1,352	490	453	430	651	1,026	3,351	2,271	700
5	988	2,943	4,103	4,519	7,079	3,404	4,483	8,179	9,505	14,115	16,090	10,520	25,551	20,118	4,192	2,811	1,020	795	1,031	372	745	1,527	1,242	1,134
6												1,916	10,645	15,402	6,615	3,998	1,478	1,838	1,384	465	364	1,098	764	1,516
7												2,784	5,547	9,053	23,619	6,438	2,937	1,688	1,048	629	296	788	1,076	1,691
8												1,499	3,264	4,003	13,618	23,540	6,514	2,676	1,139	876	439	1,046	794	1,741
9												577	1,772	1,637	4,442	13,345	24,946	5,412	3,192	1,755	960	936	1,164	2,662
10+												3,324	4,353	6,189	7,639	15,362	18,865	39,056	44,756	53,666	61,585	57,017	51,517	41,258
合計	9,973	11,277	14,265	10,780	19,390	24,878	37,431	58,117	55,001	62,035	65,453	59,472	68,385	70,462	64,987	68,309	57,087	52,942	54,354	61,381	67,816	70,670	60,193	51,264

0歳魚はごく僅かであるため、本表から除外した。2005年以前は5歳魚以上、2006年からは10歳魚以上をプラスグループとした。

補足表 4-2. 10-11 月時点の平均体長 (mm)

年齢	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
2	125	116	116	107	100	108	96	89	85	83	87	81	80	85	83	82	78	72	73	76	76	81	77	66
3	168	141	145	139	138	158	153	112	102	100	95	96	92	92	91	90	87	85	85	85	84	85	86	85
4	197	168	166	168	167	185	178	156	124	113	109	108	103	109	97	100	94	105	97	96	94	94	92	88
5	222	209	207	209	207	227	218	198	198	175	171	128	118	110	113	107	104	107	109	104	102	102	99	95
6												149	137	124	117	113	109	114	115	113	112	110	105	109
7												164	153	147	129	122	116	119	117	115	115	115	113	115
8												184	177	167	150	135	129	126	124	123	120	121	119	130
9												192	190	180	168	152	140	136	130	125	127	128	134	139
10+												224	223	215	209	197	189	169	168	174	176	174	179	183

補足表 4-3. 10-11 月時点の平均体重 (g)

年齢	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
2	51	40	40	32	26	33	22	18	16	15	16	13	13	15	15	14	12	9	10	11	11	13	11	7
3	125	73	79	71	69	103	93	36	27	25	22	23	20	20	19	18	17	16	15	15	15	16	16	15
4	206	126	122	127	124	168	150	99	49	37	33	32	28	33	24	26	21	29	23	22	21	21	20	17
5	294	247	238	246	238	316	278	208	207	144	134	55	43	34	37	31	29	31	34	29	27	27	24	22
6												88	67	49	41	37	33	38	40	38	36	35	29	33
7												117	95	84	56	48	40	43	42	39	39	39	38	39
8												167	147	123	89	64	55	52	49	49	45	46	44	57
9												191	182	156	125	92	72	66	58	50	53	55	63	70
10+												303	301	267	245	206	179	129	125	141	144	140	151	165

補足表 4-4. Logistic 式から得られた採集効率

年齢	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
2	0.70	0.67	0.67	0.60	0.53	0.61	0.47	0.37	0.31	0.29	0.33	0.25	0.24	0.31	0.28	0.26	0.21	0.15	0.16	0.18	0.19	0.25	0.20	0.10
3	0.74	0.73	0.73	0.73	0.73	0.74	0.73	0.64	0.55	0.52	0.46	0.48	0.42	0.42	0.40	0.38	0.35	0.31	0.30	0.31	0.29	0.31	0.33	0.31
4	0.74	0.74	0.74	0.74	0.74	0.74	0.74	0.74	0.70	0.65	0.62	0.61	0.56	0.62	0.49	0.53	0.45	0.58	0.48	0.47	0.45	0.45	0.42	0.35
5	0.74	0.74	0.74	0.74	0.74	0.74	0.74	0.74	0.74	0.74	0.74	0.71	0.68	0.62	0.65	0.60	0.57	0.60	0.62	0.57	0.55	0.55	0.51	0.46
6												0.73	0.72	0.70	0.67	0.65	0.62	0.65	0.66	0.65	0.64	0.63	0.58	0.62
7												0.74	0.73	0.73	0.71	0.69	0.67	0.68	0.67	0.66	0.66	0.65	0.66	
8												0.74	0.74	0.74	0.73	0.72	0.71	0.70	0.70	0.70	0.69	0.69	0.68	0.71
9												0.74	0.74	0.74	0.74	0.73	0.73	0.72	0.71	0.70	0.71	0.71	0.72	0.73
10+												0.74	0.74	0.74	0.74	0.74	0.74	0.74	0.74	0.74	0.74	0.74	0.74	0.74

補足表 4-5. Logistic 式から得られた採集効率を用いた場合の年齢別資源尾数 (10-11 月時点、単位：千尾)

年齢	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
2	4,428	4,454	3,269	2,342	4,682	7,159	31,204	69,985	63,654	69,154	21,945	7,527	6,168	5,195	2,492	1,615	1,402	2,937	3,358	6,080	5,013	7,630	2,637	1,330
3	4,284	2,895	3,970	1,685	3,090	7,279	3,938	21,648	22,239	32,523	48,314	9,481	8,032	5,278	3,787	2,398	1,196	1,306	1,227	3,736	3,758	8,304	1,984	1,126
4	2,722	3,698	6,488	3,469	5,196	5,290	4,730	3,554	14,102	16,203	30,421	52,550	21,933	16,253	5,162	2,554	1,089	784	891	1,387	2,275	7,431	5,394	1,998
5	1,339	3,988	5,559	6,123	9,591	4,612	6,073	11,083	12,879	19,139	21,824	14,812	37,750	32,287	6,465	4,689	1,795	1,327	1,656	651	1,345	2,798	2,446	2,490
6												2,613	14,705	22,051	9,890	6,165	2,386	2,811	2,087	714	568	1,743	1,318	2,454
7												3,780	7,553	12,365	33,140	9,274	4,411	2,487	1,557	953	449	1,193	1,653	2,555
8												2,031	4,425	5,432	18,573	32,607	9,161	3,801	1,632	1,257	640	1,517	1,166	2,440
9												782	2,402	2,219	6,027	18,183	34,303	7,480	4,467	2,505	1,358	1,319	1,616	3,665
10+												4,503	5,898	8,385	10,349	20,815	25,566	52,984	60,727	72,771	83,502	77,316	69,839	55,920
合計	12,772	15,035	19,286	13,619	22,559	24,340	45,944	106,270	112,874	137,019	122,504	98,082	108,867	109,466	95,885	98,301	81,310	75,916	77,602	90,053	98,907	109,251	88,054	73,979

1歳魚はほとんど漁獲されないのので、漁獲対象資源に含めない。

補足表 4-6. Logistic 式から得られた採集効率を用いた場合の年齢別資源重量 (10-11 月時点、単位：トン)

年齢	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
2	225	179	132	74	121	233	701	1,267	987	1,014	362	100	79	80	36	22	17	28	33	66	56	102	30	10
3	537	212	315	119	212	752	368	775	607	825	1,067	215	161	105	72	44	20	21	19	57	55	129	32	17
4	560	465	793	439	645	887	711	353	696	606	1,011	1,701	605	538	121	66	23	23	21	31	49	160	108	34
5	394	984	1,322	1,506	2,285	1,455	1,690	2,302	2,660	2,747	2,915	814	1,610	1,091	241	147	51	41	56	19	37	75	60	54
6												229	982	1,086	404	229	80	107	83	27	21	60	39	81
7												441	716	1,041	1,872	442	178	107	65	37	18	47	62	101
8												340	652	670	1,644	2,099	508	197	80	61	29	70	51	139
9												149	437	346	755	1,669	2,463	496	258	126	72	72	102	257
10+												1,363	1,776	2,243	2,533	4,288	4,582	6,820	7,619	10,266	12,027	10,853	10,578	9,203
合計	1,716	1,841	2,561	2,138	3,264	3,327	3,470	4,696	4,950	5,192	5,355	5,352	7,018	7,200	7,678	9,006	7,921	7,840	8,232	10,690	12,364	11,568	11,062	9,897

補足表 4-7. Logistic 式から得られた採集効率を用いた場合の年齢別資源尾数 (1 月時点、単位：千尾)

年齢	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019
2	4,157	4,240	3,126	2,239	4,497	6,872	29,995	66,884	61,382	66,536	21,003	7,231	5,941	4,996	2,405	1,568	1,355	2,852	3,263	5,905	4,874	7,417	2,558	1,290
3	4,021	2,755	3,796	1,611	2,968	6,987	3,785	20,689	21,445	31,292	46,242	9,108	7,737	5,076	3,655	2,329	1,156	1,268	1,193	3,629	3,654	8,073	1,925	1,092
4	2,555	3,520	6,203	3,316	4,991	5,078	4,546	3,396	13,598	15,590	29,116	50,482	21,127	15,629	4,982	2,479	1,053	761	866	1,347	2,212	7,224	5,233	1,939
5	1,257	3,796	5,315	5,853	9,213	4,427	5,838	10,592	12,419	18,415	20,888	14,229	36,362	31,047	6,238	4,553	1,736	1,289	1,609	632	1,307	2,720	2,373	2,416
6												2,510	14,165	21,205	9,544	5,985	2,307	2,730	2,028	693	552	1,694	1,279	2,381
7												3,631	7,275	11,890	31,980	9,005	4,266	2,415	1,513	925	436	1,160	1,604	2,479
8												1,951	4,263	5,224	17,923	31,658	8,858	3,691	1,586	1,221	623	1,474	1,131	2,367
9												751	2,314	2,134	5,816	17,654	33,168	7,264	4,341	2,433	1,320	1,282	1,567	3,556
10+												4,326	5,681	8,063	9,987	20,209	24,720	51,455	59,014	70,682	81,186	75,163	67,754	54,250
合計	11,989	14,310	18,439	13,020	21,669	23,364	44,165	101,561	108,844	131,833	117,250	94,221	104,865	105,263	92,530	95,440	78,620	73,726	75,413	87,468	96,163	106,208	85,425	71,771

2ヶ月分の漁獲と自然死亡分を減じて1月時点の資源尾数を求めた。M=2.5/寿命(20歳)=0.125を仮定。

補足表 4-8. Logistic 式から得られた採集効率を用いた場合の年齢別資源重量 (1 月時点、単位：トン)

年齢	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019
2	211	170	126	71	116	223	674	1,211	952	975	346	97	76	77	35	22	16	27	32	64	54	99	29	9
3	504	202	301	114	204	722	354	740	585	794	1,021	207	155	101	70	43	20	20	18	56	54	126	31	17
4	526	443	758	420	620	852	683	337	671	583	968	1,634	583	517	117	64	23	22	20	30	48	155	105	33
5	370	937	1,264	1,439	2,195	1,397	1,625	2,200	2,565	2,643	2,790	782	1,551	1,049	232	142	50	40	54	18	36	73	58	52
6												220	945	1,044	390	223	77	104	81	26	20	59	38	79
7												424	690	1,001	1,806	429	172	104	63	36	17	46	60	98
8												326	628	644	1,586	2,038	491	191	78	59	28	68	49	135
9												143	421	333	729	1,620	2,381	482	251	122	70	70	99	249
10+												1,309	1,711	2,157	2,445	4,163	4,430	6,624	7,404	9,971	11,694	10,551	10,262	8,928
合計	1,611	1,752	2,448	2,044	3,135	3,194	3,336	4,488	4,773	4,996	5,125	5,142	6,761	6,923	7,410	8,743	7,659	7,614	8,000	10,383	12,021	11,246	10,732	9,601
親魚量	704	718	1,042	950	1,445	1,403	1,290	1,299	1,399	1,314	1,354	1,146	1,675	1,837	2,082	2,856	2,679	3,016	3,305	4,783	5,581	4,998	5,059	4,463

親魚量は各年、各体長階級別の資源尾数に体長階級別成熟割合を乗じて求めた。性比は雌：雄=1：1を仮定。

補足表 4-9. 漁獲量 (トン)、漁獲割合 (%) および F 値

	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	近3年
漁獲量	342	258	311	259	326	342	333	583	397	475	626	529	605	680	591	417	534	352	343	475	484	460	559	501
漁獲割合	21.2	14.7	12.7	12.7	10.4	10.7	10.0	13.0	8.3	9.5	12.2	10.3	8.9	9.8	8.0	4.8	7.0	4.6	4.3	4.6	4.0	4.1	5.2	4.4
F値	0.256	0.171	0.145	0.145	0.117	0.121	0.112	0.149	0.093	0.107	0.139	0.116	0.100	0.110	0.089	0.052	0.077	0.051	0.047	0.050	0.044	0.044	0.057	0.048

2018年の漁獲量は暫定値。

補足資料5 重み付け CPUE の計算方法

太平洋北部（沖底）では、かけまわし、2 そうびき、トロールの3つの漁法で操業が行われている。これらの CPUE を統合して太平洋北部全体として1つの指標値を得るため、各年の漁法ごとの CPUE を、1972～2018年の漁法ごとの CPUE の平均値で除し、各々の漁獲量に乗じたものを合計し、その年の合計漁獲量で除したものを重み付け CPUE として求めた（補足表 5-1）。計算方法を下記の表に示した。

補足表 5-1. 重み付け CPUE の計算方法

年	尻屋崎～岩手のかげまわし				岩手の2そうびき				金華山～房総のトロール				重み付けCPUE= (A×a+B×b+C×c)/(A+B+C)
	漁獲量 (A)	網数	CPUE/ CPUE平均値		漁獲量 (B)	網数	CPUE/ CPUE平均値		漁獲量 (C)	網数	CPUE/ CPUE平均値		
			CPUE	CPUE平均値 (a)			CPUE	CPUE平均値 (b)			CPUE	CPUE平均値 (c)	
1972	819,554	19,568	41.9	1.68	135,847	1,350	100.6	1.24	1,248,282	22,829	54.7	1.49	1.55
1973	832,297	17,827	46.7	1.88	440,247	3,569	123.4	1.51	699,774	16,546	42.3	1.15	1.54
1974	509,923	15,415	33.1	1.33	351,033	3,871	90.7	1.11	803,362	17,910	44.9	1.22	1.23
1975	596,426	16,464	36.2	1.46	520,255	4,305	120.8	1.48	1,092,978	19,543	55.9	1.53	1.50
1976	448,760	11,989	37.4	1.51	447,987	4,561	98.2	1.21	1,030,594	20,375	50.6	1.38	1.37
1977	608,248	11,239	54.1	2.18	308,010	3,203	96.2	1.18	1,055,368	21,125	50.0	1.36	1.59
1978	430,422	13,152	32.7	1.32	183,595	1,739	105.6	1.30	1,207,517	22,690	53.2	1.45	1.40
1979	414,483	15,456	26.8	1.08	149,369	1,693	88.2	1.08	673,698	16,729	40.3	1.10	1.09
1980	712,740	22,069	32.3	1.30	238,604	2,073	115.1	1.41	598,924	15,140	39.6	1.08	1.23
1981	464,511	17,925	25.9	1.04	273,955	3,019	90.7	1.11	636,503	14,534	43.8	1.20	1.13
1982	540,482	19,818	27.3	1.10	212,699	2,613	81.4	1.00	546,478	15,077	36.2	0.99	1.04
1983	312,857	14,501	21.6	0.87	215,386	3,028	71.1	0.87	414,820	12,606	32.9	0.90	0.88
1984	179,324	9,470	18.9	0.76	111,506	2,461	45.3	0.56	421,514	11,422	36.9	1.01	0.87
1985	225,910	12,602	17.9	0.72	106,723	2,618	40.8	0.50	514,972	15,012	34.3	0.94	0.82
1986	371,412	16,553	22.4	0.90	119,502	2,691	44.4	0.55	468,026	15,566	30.1	0.82	0.82
1987	144,386	9,854	14.7	0.59	123,050	2,924	42.1	0.52	722,662	16,505	43.8	1.20	1.02
1988	86,619	7,463	11.6	0.47	128,790	4,364	29.5	0.36	656,975	20,572	31.9	0.87	0.76
1989	61,026	5,174	11.8	0.47	146,476	4,783	30.6	0.38	449,517	19,403	23.2	0.63	0.56
1990	54,376	4,986	10.9	0.44	94,803	4,086	23.2	0.28	391,788	19,665	19.9	0.54	0.49
1991	37,428	3,683	10.2	0.41	108,013	4,302	25.1	0.31	310,192	16,539	18.8	0.51	0.46
1992	64,178	4,725	13.6	0.55	96,793	4,619	21.0	0.26	345,773	17,644	19.6	0.54	0.48
1993	86,702	6,468	13.4	0.54	138,503	5,444	25.4	0.31	292,658	15,944	18.4	0.50	0.46
1994	58,881	4,580	12.9	0.52	143,216	4,458	32.1	0.39	222,375	11,040	20.1	0.55	0.49
1995	69,807	4,036	17.3	0.70	105,614	4,149	25.5	0.31	181,661	9,741	18.6	0.51	0.49
1996	90,563	5,056	17.9	0.72	114,123	4,431	25.8	0.32	115,168	7,007	16.4	0.45	0.48
1997	48,510	3,438	14.1	0.57	83,402	3,943	21.2	0.26	96,562	8,347	11.6	0.32	0.35
1998	47,082	3,847	12.2	0.49	112,554	4,828	23.3	0.29	125,508	9,563	13.1	0.36	0.35
1999	25,410	2,042	12.4	0.50	115,579	3,958	29.2	0.36	90,747	8,171	11.1	0.30	0.35
2000	39,882	2,449	16.3	0.65	102,525	3,536	29.0	0.36	139,678	11,658	12.0	0.33	0.38
2001	85,996	5,230	16.4	0.66	89,443	3,425	26.1	0.32	127,692	10,611	12.0	0.33	0.42
2002	64,726	3,574	18.1	0.73	51,293	1,974	26.0	0.32	173,016	11,037	15.7	0.43	0.48
2003	55,441	2,857	19.4	0.78	129,903	3,511	37.0	0.45	328,585	11,830	27.8	0.76	0.68
2004	18,197	2,181	8.3	0.34	47,357	1,679	28.2	0.35	289,563	14,952	19.4	0.53	0.49
2005	51,004	2,892	17.6	0.71	39,476	1,039	38.0	0.47	332,089	13,673	24.3	0.66	0.65
2006	55,488	2,928	19.0	0.76	66,433	1,911	34.8	0.43	454,393	12,483	36.4	0.99	0.91
2007	49,261	3,101	15.9	0.64	73,058	1,754	41.7	0.51	379,584	11,662	32.5	0.89	0.81
2008	53,920	3,687	14.6	0.59	39,120	760	51.5	0.63	466,532	11,240	41.5	1.13	1.05
2009	97,440	4,533	21.5	0.86	102,450	1,459	70.2	0.86	417,069	11,632	35.9	0.98	0.94
2010	80,030	3,435	23.3	0.94	75,611	820	92.2	1.13	372,021	10,071	36.9	1.01	1.02
2011	105,851	3,372	31.4	1.26	44,559	421	105.8	1.30	210,252	3,536	59.5	1.62	1.48
2012	122,711	3,545	34.6	1.39	99,747	500	199.5	2.45	290,328	3,963	73.3	2.00	1.94
2013	112,827	2,630	42.9	1.72	58,210	346	168.2	2.07	124,501	2,159	57.7	1.57	1.73
2014	106,212	3,496	30.4	1.22	111,136	492	225.9	2.77	99,601	1,874	53.1	1.45	1.84
2015	205,354	5,202	39.5	1.59	133,229	588	226.6	2.78	109,063	1,806	60.4	1.65	1.96
2016	186,220	3,934	47.3	1.90	158,581	606	261.7	3.21	112,919	1,978	57.1	1.56	2.27
2017	142,450	3,106	45.9	1.84	161,007	671	240.0	2.95	123,775	1,881	65.8	1.80	2.25
2018	215,581	3,707	58.2	2.34	123,588	478	258.6	3.18	197,372	2,236	88.3	2.41	2.56
平均値			24.9				81.4					36.6	